

メディアコンテンツにおける女性像の表象と  
女性が加担するジェンダーステレオタイプの  
再生産との関連性について

17SG1107      佐俣 朱理

## 目次

|                                               |    |
|-----------------------------------------------|----|
| 序章                                            | 1  |
| 第1章 メディアコンテンツのジェンダーステレオタイプ提示と受け手側の解釈          | 1  |
| 第2章 外見至上主義から見える女性の容姿評価                        | 5  |
| 2-1 「若さ」と「年相応」のダブルバインド                        | 5  |
| 2-2 美容整形から読み解く                                | 8  |
| 2-3 容姿評価から見える再生産の土台                           | 10 |
| 第3章 自虐と女性自身の再生産要因の創出                          | 12 |
| 3-1 女性が行なう自虐について                              | 12 |
| 3-2 自虐することに対する受け止め方と再生産                       | 14 |
| 第4章 女性アイドル像からみる自分らしさと女性らしさ：『青春有你2』を軸に         | 17 |
| 4-1 日本の女性アイドルの幼さとその対比                         | 18 |
| 4-2 女性アイドルの処女性                                | 22 |
| 4-3 『青春有你2』における制服とボーイッシュ                      | 28 |
| 4-4 女性同士の団結と戦い「女の敵は女」理論                       | 34 |
| 4-5 当事者以外が構築する「らしさ」                           | 38 |
| 4-6 『青春有你2』が示した「新たな女性アイドル像」                   | 42 |
| 第5章 『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』の女性表象と男性消費 | 45 |
| 5-1 中王区の登場と現実の私たちとの二重構造                       | 46 |
| 5-2 男性を消費する女性たちの考察                            | 53 |
| 終章                                            | 56 |
| 謝辞                                            | 59 |

参考文献 . . . . . 60

参考資料 . . . . . 61

## 序章

私たちはメディアの中に組み込まれながら日々過ごしている。良いことも悪いこともメディア媒体を通してコンテンツとして伝えられる。未だ根強い男女不平等を指摘し声を上げやすい SNS の登場により、#MeToo などの運動が行なわれるようになった。こういった言動や表現がジェンダー差別にあたるのかという概念が批判を回避するためにより熟考され、それを受け取る側に提供されるようになってきている。しかしそのような意識変化の中にあっても、ジェンダー差別とされる広告などが現れる事態も起こっている。

ジェンダーステレオタイプを元に出来上がった理想の女性像を持ち、それを女性に要求する男性という構図が私たちの共通認識として存在する以上、そのジェンダーステレオタイプの主な再生産要因は男性であるといえる。しかし果たして男性だけが要因と言い切れるだろうか。差別の意識という共通項は男性のみならず、女性にも存在する意識である。本論文では女性を差別する側として当たり前のように認識されている男性ではなく、女性自身の中で再生産されるジェンダーステレオタイプについて様々な角度から分析していく。

## 第1章 メディアコンテンツのジェンダーステレオタイプ提示と受け手側の解釈

具体的なコンテンツの分析に取りかかる前に、この章ではメディアコンテンツにおいて映し出されるジェンダーステレオタイプの提示とその提示に対して行なわれる受け手側の解釈について考察を行なっていく。

メディアコンテンツには様々な容姿、性格を持った人物たちが登場する。メディア媒体を通して映し出される様々な情報はその人物たちに直接会うことが無くても私たちに多大な影響をもたらしている。メディアコンテンツの多くが演出のついでにフィクションであるが、そこで提示されている情報をまるで真実であるかのように受け止められてしまうことがある。またジェンダー差別だとして告発されたメディアコンテンツに対して、その告発を行なった側に批判の矛先を向ける人も存在している。江原由美子(1988)はハウス食品工業のテレビ CM「私作る人、僕食べる人」に対する告発とその告発した側に対して向けられた反発・批判の分析を試みた。CM の内容に抗議した人々に対して賛同の意見をもって支持

された反面、その抗議した人々に対してその抗議は不適切であるという意見が向けられた「不適切性」が生じた要因について江原は3つの観点を提示した。まず1つ目がCMの「受け手」は「送り手」と「場」を共有していないため、いかなる「礼儀上」の義務を負ってはいないが、CM告発といった「場」が形成された時には「受け手」はCMの「主要関心」である「広告」という文脈でそのメッセージを解釈し、その「主要関心」に添った形以外の解釈からする「告発」を「不適切」と感じるという点。そして2つ目は告発という「場」の設定は、たちどころにこの「ユーモア」「遊び」の相互拘束性という「礼儀上の」規則を呼び起こし、「むきになって」といった人物描写上の言葉は、「遊び」を「遊び」として解釈する余裕のなさに対する「場」の論理からする非難、あるいはそうした余裕のない成員に対する人物的非難としての意味を持つという点。そして3つ目は「私作る人、僕食べる人」というCMを「性別分業肯定」として解釈するには「受け手」の解釈作業を必要とし、そのことはCMを「告発」するのは非難の対象が「不適切である」という感覚を生み出すこと、そして「受け手」自体が告発されたという感覚を生み出すことからの反発という点である(江原1988:59-60)。この江原の指摘を踏まえると、差別的表現がなされていたとしてもその差別的表現とされるものを提示された視聴者側がどう解釈し、受け取るかによって反応が異なるということである。そして差別的だとして指摘する者が現れるが、その出現と同時にその指摘に対して指摘者を表現されているものの面白さを汲み取れない奴として認識したり、自分自身の解釈が間違っていると指摘されたように感じたりする者が出てくるということがわかる。このように、メディアコンテンツ内で描く内容について制作側の意図がどれだけ盛り込まれていたとしても、その映し出されたものの解釈を行なうのは視聴者である受け手側である。そのため本来制作側が思い描いていた意図と異なる解釈が受け手側でなされることも同時に起こるのである。またその解釈には受け手側の知識量の差などから解釈度合いが異なるため、ある人が指摘をしたとしても他の人は何故指摘をするのか理解できないという人も同時に存在するのである。

それを踏まえここでメディアコンテンツの制作側についてもここで触れておきたい。メディアコンテンツは無数に存在するが、そこで表現された内容はとても大きな意味合いを持つことになる。映像作品やバラエティー番組、小説やマンガ、はたまたニュースの報道を一つとってもそこには作り手のジェンダーステレオタイプが見え隠れし、私たちはそれを各々の解釈作業の結果、享受してしまっている。そうした中でジェンダーステレオタイプの表現がされる要因としてメディア業界の男女比率がよく根拠として挙げられる。実際にメ

ディア業界の男女比率について、日本マスコミ文化情報労組会議(MIC)が新聞・放送・出版を対象に社会の意識形成にかかわるメディア業界の役員や管理職、従業員に占める女性割合の状況について調査したところ、新聞・放送・出版のいずれも「2020年までに指導的地位に女性が占める割合を少なくとも30%程度とする」という政府目標とかけ離れた状況であったと発表している。調査結果として新聞は新聞労連に労組が加盟する新聞社・通信社を対象に回答があった41社の中で役員数(会社法上の役員)は3.13%、放送は在京・在阪テレビ局を対象に調査を行ない、在京・在阪局ともに報道部門、制作部門、情報制作部門の局長に女性は1人もおらず、出版に関しては出版労連加盟組合並びにそれ以外の出版関連企業あわせて41社回答があった中で役員(会社法上の役員)は8.3%という結果になったと公表している<sup>1</sup>。このことから現在の日本のメディアコンテンツの作り手の多くを男性が占めており、かつ制作における決定権もほぼ男性によって握られていることがわかる。

こうして依然男性が作り手の多くを占めながら、近年ではポリティカル・コレクトネスを意識した表現が増えてはきている。しかし未だに女性に対する差別表現だとして炎上するものも少なくない。ここで田中東子(2012)の指摘を取り上げたい。田中はメディアで表現される女性は男性によって作り出された「誤りの姿」であると結論づけるメディアと女性の問題を取り上げた先行研究を批判的に検討した上で、それらの研究を全面的に否定するわけではないと述べてつ、そのアプローチにはやはり限界があると述べている(田中 2012: 115-116)。そしてその限界については分析や批判の際に「正しい女性像」という発言をすることによって、最終的に同質的で唯一の「あるべき女性」の姿をメディアは正しく表現するべきだという主張に行きついてしまうことであると指摘している(田中 2012: 116)。メディアコンテンツで表現される女性像はジェンダーステレオタイプを女性に押し付け、本来の女性を映し出していないという論点は正しくもあり、女性のみ本来の姿や「自分らしさ」を映すことを要求していること、そしてそれを半ば強制している点においてメディア側が女性のジェンダーステレオタイプを再構築してしまっていると考えられる。またそれは「自分らしさ」を謳う側が女性自身から発信されている構成になっているため、「自分らしく」という曖昧なものを旧来の「女性らしさ」とは異なる形で女性自身の手によって「自分らしさ」に取って代わられた新たなジェンダーステレオタイプが提示されている。真正面からその

---

<sup>1</sup> 日本マスコミ文化情報労組会議(MIC), 2020, 「メディアの女性管理職割合調査の結果について」(<http://shimbunroren.or.jp/wp-content/uploads/2020/04/20200306MIC-1.pdf>) 2020.1.7 閲覧.

表現を受け止めると今まで求められてきたジェンダーステレオタイプの「女性らしさ」から解放されることを求め、同じ女性たちに「自分らしさ」を獲得するよう訴えかけているように見える。だがこの表象は未だ制作側の決定権を持つのは男性たちの手によって、「女性らしさ」に代わる「自分らしさ」の要求を女性に代弁させてしまっているといえる。

以上ここまでの論点を一度整理すると、2つのことがわかる。メディアから提示される情報は受け手側の解釈作業を必要とするため、受けた側の解釈度合いによって受け止め方が異なるということ。そして依然男性がメディアコンテンツの作り手の重役といえるポジションの多くを占めながらポリティカル・コレクトレスを意識した表現がなされるようになったことで、メディアコンテンツ内で提示される「女性像」が「自分らしさ」を要求してくるということである。今まで映し出してきた女性の姿は男性が持つ女性に対するジェンダーステレオタイプを元に作られているものであるためジェンダーバイアスがかかり、ステレオタイプ的であったため非難の矛先が向いてしまった。それを回避するためには「正しい女性像」の提示をメディアコンテンツ内でする必要がある。そしてジェンダーステレオタイプを押し付けられてきた側である女性たちは、「女性らしい」という言説ではなく「自分らしい」姿を獲得することで周りから要求されるジェンダーステレオタイプから逃れられることが可能である。そのため近年ではその両者の要求を叶えるために、表現に配慮した映し出され方がなされるようになったのである。

しかしこの事実は女性たちに対してジェンダーステレオタイプの「女性らしさ」が反対のイメージであるとされる「自分らしさ」とすり替えられることで、今度は「自分らしく」を強制されているという面もあると考えることができるのではないだろうか。江原(1988)が指摘した不適切批判の考察における解釈作業を踏まえると、「自分らしさ」という解釈は個々に異なっており 1 つに絞り込めない無限のものである。しかし現在のメディアコンテンツ内で女性に要求されている「自分らしさ」は以前まで求められていた「女性らしさ」とある種同義であると言えるのではないだろうか。このような問題意識から、第 2 章以降では女性自身がジェンダーステレオタイプからの解放を望み、「自分らしさ」を追及する過程において今までの「女性らしさ」の基準が出現し、その旧来の「女性らしさ」を「自分らしさ」と解釈をすり替えることで女性自身がジェンダーステレオタイプの再生産に加担する現状について具体的な事例を挙げて考察を行っていく。

## 第2章 外見至上主義から見える女性の容姿評価

### 2-1 「若さ」と「年相応」のダブルバインド

日本では実年齢とそれに対する見た目の「若さ」が求められている。テレビ番組途中に放送されている通販会社の化粧品などにも女性を映し出し、年齢がいくつであるのかという問題形式として提示され、実年齢よりも若く見える肌を持っていることを化粧品の効能として提示している CM も多く見られる。また女性ファッション誌ではそれぞれの年代に合ったファッションや美容情報を提供することで流行を提示している。そして同時に各誌のモデルたちによって年齢に見合った格好というものが表現されている。そういった事実を踏まえ、この章では容姿評価を切り口にまずは女性に要求される「若さ」と「年相応」の要求について論じていく。

男性とは反対に女性はメディアコンテンツ内で容姿について言及、または指摘を受ける構図が頻繁に発生する。実際に「若さ」を提示することで批判を浴びる CM も出現してきた。瀬地山角は2016年に放送されたインテグレート<sup>2</sup>のCM<sup>2</sup>の炎上要因について、ファッション雑誌はそれぞれ、年齢層ごとにターゲットがあり、そして保守的なのかモード系なのか傾向を明確にしており、読み手はそれを知っていて好みのものを選択し、そこには読まないという選択肢もある。20代後半向けのファッション誌も当然あり、それを買うのは自由だが、「この化粧品を買わないと25歳過ぎたらかわいくない」と関係ない人にまで訴求してしまうため、インテグレートは炎上するのであると分析している(瀬地山 2020: 111)。以前の日本には、共通認識であった未婚女性を指す「クリスマスケーキ」などの女性としての賞味期限を指す言葉が存在していた時代があったが、資生堂が広告として打ち出したものに含まれるメッセージは25歳を区切りとし、女性の若さに対する言及を行なったため批判を浴びたのである。

なぜこのようなことが起こったのだろうか。炎上するということはそのメッセージを向けられた女性たちが企業から「若さ」を要求されたことに対してジェンダースtereotypeの押し付けであるという認識が無ければ企業に対して批判は向けられない。そして消費者である対象の女性はその認識があったとしても、企業側にはどういった表現がジェンダースtereotypeの押し付けに繋がるかという認識が欠如していたということである。日本

---

<sup>2</sup> 資生堂インテグレートのCM『Unhappy Birthday』(2016)参照



の化粧品会社が打ち出す CM は女性自身がモデルをしながら、商品ターゲットである同じ女性に対して若くなくなっていくことの恐怖や常に若くあることを追及していかなくてはというメッセージがセリフによって消費者に届けられている。

またかつて「美魔女」という言葉が流行し、そして流行しながらも世間では批判的に捉えられた「美魔女」から「年相応」という概念と「若さ」と同時に見ることが出来る。「年相応」とは自分の年齢に見合った姿でいることを指す言葉だが、相手を批判することが出来る意味合いも同時に持っている。そこには自分自身の年齢に合った発言や服装を心掛けろというニュアンスが内包されている。このように日本では実年齢よりも若く見られることが世間からの評価が高いという事実と同じ線上に、「年相応」という年齢に合った姿であれという概念が存在してしまっているのである。谷本奈穂は美魔女批判を例に挙げ、「年相応」「ありのまま」言説は、耳ざわりがよく、多くの人に受け入れられやすいだろうと述べつつ、この耳ざわりのよさは、美魔女を批判する際に、フェミニストであれ、そうでない人であれ、正当性を与えてくれることになる」と指摘している。谷本によれば、美魔女批判を支える「年相応」言説を捉えるとき、その批判は3つの認識から生み出されているという。認識の1つ目はフェミニストによる批判のように女の価値を外見や若さではかる風潮を問題視するもの。そして2つ目は化粧品会社、医療、マスメディアといった企業や市場に彼女たちがコントロールされているという認識。そして3つ目が美魔女を家事や育児をしない自己中心的な存在と考えるものであると述べている。1つ目と2つ目の批判が示すのは女性に対して「若く美しくあれ」という規範の存在とその存在が女性は美や若さといった「性的魅力」を持つべきであるというステレオタイプの存在を示唆しており、この2つの批判はそのステレオタイプから女性たちを解放しようとするものになる。そして3つ目が別の規範として捉えることが可能であり、女性に「良妻賢母」というステレオタイプを当てはめ、「年齢以上に若く美しくあろうとすることは禁忌」「年を重ねた女が若く美しく装うのはみっともない」という「若作りの禁忌」規範がすけてみえる。谷本はこれらを踏まえ「美の呪縛」について「性差別とエイジズムの結託」と結論付けた。そして谷本はその「美の呪縛」について「若くあるが、若作りしていない」と同時に「性的存在でありつつ、(性的ではない)母としての機能も果たす」、これらすべての規範を満たす女性こそが「美しい」のだ、という「呪縛」であり、論理的には両立困難なそれが、女性に課されていると指摘している(谷本 2015: 51-54)。これら谷本の分析を元に「若さ」と「年相応」を捉えると、女性には両立困難な美の基準が要求されていることがわかる。「若さ」や「年相応」であることに対して好きなメ

イクや服装を自己表現で自分がいたい姿でいることは誰にも咎められることではないが、いつまでも若くあることで高評価を得る人とそれがむしろ若作りと見なされ「年相応」という不確かでありながら明確な基準を要求される人の両者が同時に存在している。自分がしたいことをそのまま表現することは周囲の判断の下で評価対象になり、容姿や服装における自分らしさや個性は自分自身で構築するよりも他者から与えられた価値によって構築されていく。現に化粧品の CM において消費者からの批判が相次いだことで消費者に訴求するメッセージを女性が発する場合には、「自分らしく」という言葉を用いて表現されるようになったが、男性はそもそも化粧品を使用し、「自分らしく」いようとは訴求されないのである。このことからわかるように「若さ」と「年相応」という両立困難な美の基準が同時に要求される女性はダブルバインド状況に置かれているといえる。

このような状況に女性は置かれながら、「若く」あろうとし「年相応」でいようとする。しかしメディアコンテンツ内で女性の年齢に対して言及されるものも完全になくなっていくとはいえず、その呪縛から逃れることが出来ない。これは第 1 章で論証した男性がメディアコンテンツ内の制作側の割合を多く占めることで発生する事態であるといえるだろう。こやま淳子は自身の仕事現場で日々行なわれている炎上するかしないかを事前に臆病すぎるほどチェックしているという事例を挙げ「炎上した広告制作の現場に実は女性がいた」と聞いても、なんら不思議ではない。男社会の中で意見をねじ伏せられ、あるいは忖度して何も言えなかったのではないかと、などとも言われるが、もし意見を求められたとして、自分の感覚が「女性の総意」だと 100%言い切れる女性なんているのか。フェミニストの間でだって色々な意見があるし、女性でありながら女性差別を肯定する人もいる。私たちは何かと女性代表であるかのように「女性の意見」を求められるが、女性だって本当は多様なだと述べている<sup>3</sup>。この指摘を踏まえると美魔女と呼ばれ評価されることを望む女性もいれば「若く」あろうとせず「年相応」でいることを望む女性も存在することから、何が炎上し、何が批判されるのかというポイントは第 1 章で触れた解釈作業の解析度合いの差によって異なり、それはジェンダーステレオタイプを押し付けられる女性であってもその受け取り方は異なるということが考えられる。

しかし CM などに代表される女性に要求される「若さ」は同時に「年相応」であること

---

<sup>3</sup> こやま淳子, 2019, 「『炎上 CM』を広告業界がやめられない明快な理由: 「怒り」を表明する女性がなぜ増えているのか」 (<https://toyokeizai.net/articles/-/282823?page=4>) 2020.12.22 閲覧.

が求められており、それも若くあることをメディアコンテンツ内で言及するのは同性である女性である。この構造の複雑さが問題を見えにくくしているといえる。メディアコンテンツ内で要求される女性の「若さ」と「年相応」は女性自身をダブルバインド状況に置くものであるが、その状況に女性は置かれながらも自分が努力している結果を他者に提示するためにコンテストに参加し、「若さ」を提示する行為も見受けられるため、男性が本来女性に対して行なっていた年齢評価を女性自身が自ら行なうことで「自分らしさ」の追求過程の1つとして捉えられてしまっているのである。

## 2-2 美容整形から読み解く

2-1 では外見至上主義の日本社会における「若さ」と「年相応」のダブルバインドについて考察を行なったが、この 2-2 では外見や容姿について女性の美容整形という角度から考察を行なう。

外見至上主義社会の中では男女問わず気がつけば異性の目を意識し始め、こういった容姿や格好が好まれるのかを知ることになる。そしてそのような社会の中で男性よりも女性の方が容姿を貶される機会が多い。それは男性と比べて女性の容姿に対する評価が常に行なわれているからである。これはメイクの必然性からわかることである。今ではメンズコスメが誕生し、男性でも日常生活の中でメイクをしている人も存在している。しかし女性にはある程度の年齢になるとメイクをしなくてはならないという誰に強制されているわけでもないエチケットという名の社会的なルールが存在している。女性のメイクは人と対面する際の最低限のマナーとされているのである。そのため容姿端麗ではなくても容姿を着飾ることそのものが女性には要求されている。瀬地山はルミネの動画<sup>4</sup>を踏まえ、ルミネの動画の主人公の女性は、服装はカジュアルで髪型やメイクもナチュラルなよくいるふつうの女性であり、職場では単に一人の働き手として評価されたいと思っているはずが、ファッションや髪型などを後輩と比較され、頼んでもいないのに一方的に、「需要が違う」などといわれてしまう。しかも、そのことで本人が葛藤を抱えることになることと指摘している(瀬地山 2020: 108)。他者から評価を受けるときに何が良いとされるのかということを勝手に提示され、嫌でも身をもって知ることになる。この容姿における周りからの評価と強いこだわりが

---

<sup>4</sup> ルミネ『働く女性たちを応援するスペシャルムービー』(2015)参照

美容整形に結びついているといえるのではないだろうか。

近年では美容整形をすることは世間的にも容認される風潮がある一方で、未だに美容整形を行なったとしてもあえて隠す風潮も存在している。そしてそれと同時に SNS の普及によりいわゆる整形垢と呼ばれる実際に美容整形を行い、どの部位にどのくらいの金額がかかったか、どういった美容クリニックで手術を行なったかなどの評価をまとめている Twitter や Instagram のアカウントが存在している。主にアカウントを運営しているのは女性であり、それをフォローしているのも女性が多い。このように美容整形をしたことをむしろポジティブにカミングアウトし、それも重々しくなく「自分になりたい自分になりたい」という理由で公表するのである。

プチ整形ともいわれる簡単な施術で済む美容整形もあれば、外科的手術を伴いダウンタイムが必要な美容整形もある。その中で実際に美容整形を行なう女性はどうのようきっかけから施術に踏み切るのだろうか。谷本(2017)が行なった調査によると、美容整形実践者・希望者が重視する「他者」とは、女性の家族や友人であり、身近な同性であることがわかっている(谷本 2017: 9)。そして美容整形をするきっかけについて「普通(人並み)になりたい」「人よりキレイになりたい」といった動機に基づくというより、日常的な(特に同性同士の)何気ない会話やコミュニケーションに基づいて生み出されているとしている(谷本 2017: 9)。この谷本の調査結果は身近な同性の他者がきっかけで美容整形を行なう動機になっていることを明らかにした。2-1 で触れた「若さ」と「年相応」について同性である女性が CM では語りかけてくることを述べたが、異性と同じくらい身近な同性の評価も自分の容姿評価を肯定する要素の 1 つとして存在しているのである。谷本は調査結果を踏まえ、女性同士のコミュニケーションという地平の中には網の目のような形で発動する社会的な圧力も存在することを忘れてはならないと述べつつ、どのような契機で加工を試みよう、目指すべき外見の基準は(自由なものではなく)社会によって構築された一律な価値観に従っていると指摘する(谷本 2017: 10)。以上の谷本の指摘を踏まえると女性が行なう美容整形を行なうきっかけが身近な同性にあり、これは一見自ら選択した行動でありジェンダーステレオタイプが関与していないようにみえるが、その自分のためだと疑わないその価値観は他者からの価値判断によって構築されできたものであり、それを女性たちの間で共有されているに過ぎないということである。そして SNS など自分の意見が発信しやすい環境が整うことで美容整形によって自分が求める美しい容姿を手に入れ、それを自己表現の 1 つとしてすり替え、自分のなりたい姿であると信じて疑わなくなるのである。容姿の美しさという

「自分らしさ」を獲得するために外科的手術を行なうことは主体的な行動であるが、それは容姿を美しくすることが周囲からの評価対象であるという事実を裏付ける証拠である。そしてその「自分らしさ」は女性が男性から見て可愛く、美しくあれという評価の場に女性が晒されていることで獲得される「女性らしさ」であるといえる。

ここまで美容整形における容姿評価との関わりを考察してきた。自分が思う美しさを手に入れるための美容整形は他者からの価値判断が含まれ、それを女性たちの間で共有されることで女性のみのコミュニティ内でその価値観は循環されるものとなり、「自分らしさ」の獲得と結論付けられる。この事実は女性自身によって容姿におけるジェンダーステレオタイプが再生産されているといえ、美容整形がその要因の1つとして挙げられるといえる。

## 2-3 容姿評価から見える再生産の土台

ここまで「若さ」と「年相応」の要求におけるダブルバインドと美容整形からメディアコンテンツに映し出されることで起きるジェンダーステレオタイプの再生産について考察を行なった。男性に必要とされるために「若さ」が必要であることを自覚している女性は、自分のためだと思いながら評価を下す男性に訴求されてしまっている。男性は評価を下す側にいるため女性ほど強く容姿については追及されないのである。このように「若さ」と「年相応」の要求はダブルバインドなのに対して、容姿評価についてはダブルスタンダードが要求されてしまっている。メディアコンテンツ内で日々映し出される数多の女性像におけるジェンダーバイアスに巻き込まれずに過ごすことは無理にも等しい。自分のためであると実行していた容姿に対する「努力」は実は他者から与えられたものが含まれており、それが日常の一部になってしまうと、あたかも個人の判断であるかのようにすり替えられてしまう。

広告に映し出された人物が肌のシミやしわなどを含む容姿を加工して表現されているものを広告のターゲットである消費者たちは美の基準として無意識のうちに感受してしまっているともいえる。陶器のような白い肌に長い手足、そして棒のように細い身体といった健康的ではない身体がスタンダードとして映し出されている。その前提の上で女性であれば「可愛い」「綺麗」などの評価を受け、男性であれば「イケメン」などと良い評価をされる。それ以外の判断を視聴者側がした際は「ブス／不細工」という括りに入れられる。日本各地

の教育機関で行なわれている ミスコン／ミスターコンなどを例に挙げることができるが、学生時代から容姿自体を評価し賛美する土壌が既に整っており近年見直す動きがあるものの未だに続けられている。フィクションの世界から提供された虚像を現実世界に住む私たち視聴者が取得し、その虚像を基準にしているためである。

ここで芸人として活動している尼神インターの誠子とゆりやんレトリィバァの記事を取り上げ、日本のバラエティー番組でも醜い容姿とされていることがネタとして提供され、笑いに昇華されるという構図の存在について明らかにする。この2人は共に容姿に対する「イジリ」をネタにしていた点が共通している。ここ最近尼神インターの誠子が痩せたことに対して『『尼神インター』誠子が激ヤセ!“美の追求”に『芸人やめたの?』』という見出しの記事が出て、本文には痩せたことについて高評価なコメント掲載しつつ、痩せたことで芸人としての需要がなくなっているといったインターネット上の意見を取り上げている<sup>5</sup>。そしてゆりやんレトリィバァはコロナ禍でダイエットに目覚め、ダイエットを行なった。するといわゆる「いい女」になったという評価が世間でなされ、VOGUE GIRLのインタビュー記事「『自分らしさ』は私が決める！ ゆりやんレトリィバァ、挑戦の先にあるもの。」の中でも痩せたことで周りからの評価が変化したことを語っている<sup>6</sup>。この2つの記事から容姿は評価されるものであり、それと同時に「若さ」や「年相応」だけではなく容姿に対する「需要」を履き違えるなどという不特定多数からのジャッジがなされているということがわかる。女性自身が何故容姿について「自分らしく」いようとし、痩せたことで周りの評価も変わるのかという点について、反対に男性は言及されないのである。またゆりやんレトリィバァの記事は痩せることで「自分らしさ」を獲得したことが言及されているが記事内では痩せることで男性から評価されることが言及されていることから「自分らしさ」と「女性らしさ」が意味合いを変えて彼女自身が獲得しているといえる。

これまで容姿評価からみる「若さ」と「年相応」のダブルバインド、そして女性が行なう美容整形を論点として考察を行なった。以上のことから男性から良いとされる女性像をメディア側がジェンダー表現について適切に考慮しようとする中で、自分らしさを追及し、

---

<sup>5</sup> まいじつ, 2020, 「『尼神インター』誠子が激ヤセ!“美の追求”に『芸人やめたの?』」 (<https://myjitsu.jp/archives/245610>) 2020.12.22 閲覧.

<sup>6</sup> VOGUE GIRL, 2020, 「『自分らしさ』は私が決める！ ゆりやんレトリィバァ、挑戦の先にあるもの。」 (<https://voguegirl.jp/beauty/wellness/20201208/yuriyan-retriever-interview-2020/>) 2020.12.22 閲覧.

女性でも男性の視線を気にせず自分になりたい姿を目指してもよいという女性像を映し出すが、この映され方もまたジェンダー規範の生産に結びつくという二重構造になってしまっていることが明らかになった。時代と共に良いとされる女性像が変化していつているが、それはあくまでメディア媒体並びにそこから発信されるメディアコンテンツ内で描かれる姿であり、現実の姿とは乖離してしまっているのである。そうして美の基準は女性自身が加担する形で保たれ続け、ジェンダーステレオタイプが再生産されていくのである。

### 第3章 自虐と女性自身の再生産要因の創出

第2章では外見至上主義の日本社会の中における女性自身の容姿評価について考察してきた。そこでは女性自身がやりたいと思う姿になることも誰かに作られた理想像であり、それを「自分らしさ」として肯定することでジェンダー規範を再定義してしまっている事実が見えた。その事実を踏まえこの第3章ではメディアコンテンツ内で表出する女性自身が行なう自虐発言について考察を行なっていく。女性は容姿だけではなくジェンダーステレオタイプから逸脱している行為と見なされた場合、男性から他の逸脱していない女性と比べられジャッジされる事態が発生する。そこでバラエティー番組やドラマ内など様々なメディアコンテンツ内で登場する「女性として魅力がないということを自虐発言に昇華することで周囲の笑いを誘う描かれ方をする女性」についてその発生要因を探りながら、実際に女性の自虐発言について言及がなされているものを事例として挙げ、女性自身におけるジェンダーステレオタイプの再生産との関連性についてみていく。

#### 3-1 女性が行なう自虐について

他者からの容姿評価については第2章で考察を行なった部分ではあるが、改めてここでまとめておこう。女性は「女」としての対応や行動が幼少期から求められ、どのような行動が男性から好かれるのかということを嫌でも経験させられることになる。異性からの評価は褒められることもあるが、それと同時に貶される要素も含まれてしまっている。そして評

価される対象から外れるためには自分を率先して貶す発言をする必要があるのである。それが自虐発言という手段であり、自分を卑下する発言をすることで男性からの評価対象から外れるだけではなく、同性である女性からの評価も変化することになる。その理由は自虐発言という手段を取ることで男性に媚びを売る対象から、そうではない人物に変化を遂げることが出来るからである。

しかし女性が行なう自虐発言は自分自身を守るためだけでなく、「あざとい」と非難される発言と紙一重なところもある。慎ましい女性像からかけ離れた言動や行動を行ない、一般的な女性よりも下の立場にいることを自ら明かし、同じフィールドにいないことを示す行為であると同時に、あえてその発言をすることで相手からの自虐発言の否定の言葉をもらうことが出来るからである。上野千鶴子は女子校文化におけるダブルスタンダードについて男から見て「いい女」と、女から見て「いい女」とが違うのはあたりまえで、男が女に与える価値を女がコントロールすることはできないから、男から見て「いい女」は、女のあいだでは怨嗟と羨望の的になるが、女から見て「いい女」とは、男視線をはずしているばかりか、「男にウケない」ことを安心の条件とする意地悪な評価が含まれていたりすると語っている(上野 2018: 202)。さらに上野は女性がミソジニーを自己嫌悪として経験しないで済む方法について、自分を女の「例外」として扱い、自分以外の女を「他者化」することで、ミソジニーを転嫁することであるとし、そのためにはふたつの戦略があるとしている。ひとつは特権的なエリート女、男から「名誉男性」として扱われる「できる女」になる戦略、もうひとつは、女というカテゴリーからドロップアウトすることで女としての値踏みから逃れる「ブス」の戦略であると述べている(上野 2018: 249)。男性から「いい女」として扱われる同性の女性に対して、自己嫌悪に陥らないようにするためには上野が言う「女というカテゴリーからのドロップアウトする」ことでそこから離れることが出来るということである。実際に自虐発言を行なう女性を見て、その自虐発言の内容が女性たちの間で共感を呼ぶ一方、その発言に対して男性が便乗してくる構図が頻発する。女性同士の間で共感を呼ぶのはその発言を行なうことでその発言をしている女性が自分の敵ではないと認識できるということと、自分自身の中で思っただけでもあえて口外していないだけなのである。しかしその女性同士のコミュニティの中に男性が介入し、自分の好みを語り品評を行なう場として乗っ取られるのである。



### 3-2 自虐することに対する受け止め方と再生産

自虐発言を行なう女性がメディアコンテンツ内で描かれることはあっても、その自虐発言に対して自身を振り返り直接言及している人はあまり見かけることはない。その数少ない中でエッセイストの犬山紙子が語る自虐について取り上げる。彼女は自身の経験から以下のように語っている。

日本には「女なんだから」とか「お母さんなんだから」とか、そういう考え方がまだまだ根深くて、女性たちは日々の暮らしの中で自分らしさを見失いがち。さっきも申し上げましたが、「趣味とか睡眠が大事」とか言っていると、「お母さんなんだから、遊びより子育てしろよ」とか横槍を入れてくる人もいます。でも、そんなの無視でいいと思います。それから、「劣化」とか「女の価値」みたいな言葉も全部無視していい。あれは、世の中の男性が女性を吟味するためにかけている呪いです。今、私は38歳ですけど、私が20代後半だった頃は、「女は若い方がいい」とかそういう社会圧がもっと強かった時代です。だから、そこから逃れるためには自虐するしかなかった。要は、道化となることで、傷つくことから自分を守ってきたんです。だけど、「アラサーなのに独身の私ってやばくないですか〜？」って、自虐で周りを笑わせているうちに、自分のことをどんどん嫌いになっていくし、自信も失っていく。そして、その価値観を周りに振りまいて同じ立場の人も傷つける……。同じような事例をたくさん見てきて、そこから脱却したいと思いました。<sup>7</sup>

犬山は自虐してきた自身を振り返り、そこには男性からの評価が存在し、関係していたことを語っている。そして自虐発言をすることで周りの人々を笑わせ、自分だけではなく周りも傷つけてきたと回顧している。そして犬山は自虐と道化を同じ意味合いで捉えていることがわかる。

犬山と同じように自身の自虐について改めて振り返ることで自虐をすることを止めたマ

---

<sup>7</sup> Woman type, 2019, 「【犬山紙子】“自分らしさ”を押し殺していた20代を振り返る『自虐・思考停止をやめたら私らしい未来が見えた』」( <https://woman-type.jp/wt/feature/15254/>) 2020.11.6 閲覧.

ンガ家のつづ井の発言を取り上げる。彼女が綴っている note において『『裸一貫！つづ井さん』についてちょっと真面目に話させてくんちえ〜』が公開され、そこには一般的に女性の幸せと考えられているものを持たないつづ井が自分の趣味で楽しみを得ていることを周囲からそれに対して中傷される事態が発生し続けたため、先回りをして自虐することを始めた結果円形脱毛症になってしまったという内容が記載されていた。女友達と楽しく過ごす日常エッセイマンガを連載している彼女は脚色があるものの、ほぼノンフィクションのネタをマンガにしている。この note で公開された記事の中には、もう自虐はしないことが明記されている。しかしこの記事が公開された後、この記事内容にすら様々な意見がつづ井に投げられ、note の内容に追記する事態になった。以下は追記された彼女の発言である。

私は本文中で「自虐は私の怠慢だったので、もうしない」と書きました。当たり前ですがこれはあくまで私にとっての話なので、「みんなも自虐やめよ！自虐やめたら自己肯定感高まるよ〜！ツシャ！」て話のつもりではないです。価値観を強要されていやだった（五・七・五）ので、この note を読んで下さった私とは違う価値観の方に、「そうかそうしなければダメなのか、それが令和の‘望ましい生き方像’だ」とこの人は言ってるのか」と感じさせてしまったのなら、同じ構図を再生産していることになってしまいます。そうならめっちゃくちゃに悲しいなあ、ちがうよ〜と思ってこの文章を書いています。各々が自分の生活をよりよくするための手法を見つけてこ〜という話だと思います、私にとってはそれが「自虐をやめる」ということでした。その人にとって何が救いになるかなんて当人でもなかなか分からないことだと思います。私は私の話をしています。（あと「自虐」と「謙遜」の違いも難しいけどここではまた別の話ですね）<sup>8</sup>

つづ井はこのように note に追記し、持論を述べた。つづ井は自虐について自身の怠慢であったと述べている。また追記の最後には自虐と謙遜の違いについても少し触れている。犬山は自虐を男性から求められるものに対して笑いで返す道化と捉えているのに対し、つづ井は自虐を自身の怠慢であり自虐と謙遜を近い存在で捉えている。そしてつづ井が行なった自身の意思表示に対して、新たな姿の提示を強制されているように解釈した不特定多数

---

<sup>8</sup> つづ井, 2019, 『『裸一貫！つづ井さん』についてちょっと真面目に話させてくんちえ〜』 (<https://note.com/happyhappylove/n/n28f73ff5cdce>) 2020.12.19 閲覧.

の人々から非難されるというこの事態からは自虐という行為を取ってきた同性の女性が女性らしさの強制も自分らしさの強制もどちらにも反発する要素が残されているということを示している。そしてそれをつづ井は「同じ構図を再生産していることになる」としている。この犬山とつづ井の両者の発言を踏まえて考えてみると、女性が自身の女性性の欠如と呼ばれてしまう部分を先回りして自虐することで周りを笑わせる構図はむしろ女性性を再生産していくことに繋がっているといえる。

これらを踏まえるとやはり自分を卑下する発言を笑いに変えることが再生産につながると考えられるのではないだろうか。そこで田中(2012)が行なった『ベストタイム』の「平野寿将の参上！お助け料理人」という企画コーナーで映し出された主婦の純化装置についての分析をここで取り上げる。指南役が主婦に教えることで上手くなっていく様子を映すことが多い中で、この番組では何度教えても上達しない主婦を映し出した。その映像を見ながらスタジオにいるキャスターがリアクションを取っている。出来ない様子を映し出したあと、今度は女性キャスターがスタジオで料理実習を行い、映像の主婦と同様手際の悪さを露呈し、指南役から罵倒される。それに対して女性キャスターは自分自身の出来なさに笑いという対抗手段を取った。田中はその女性キャスターの行動に対して「適切に実践できない事実が、自己検閲的に『自らの実践を笑い飛ばす』行為を生み出してしまうのだろう。＜良い主婦＞／＜悪い主婦＞の判断基準—それはつねに、虚構のものであるにも関わらず、ある一定の強制力を持ってしまう—と自己のふるまいを照らしあわせて、自己のいたるなさを罰するために、彼女たちは自らを笑いの対象の位置に貶めている」（田中 2012: 153）と分析する。この田中の分析を踏まえると、女性らしさに代表される料理においてそれが出来ない主婦を映し出し、その当人は男性からの指摘について笑いで返す行為は料理が出来るかできないかは人によって異なるが、主婦というイメージは一義的であり、良い悪いが判断しやすいため男性のみならず、料理が出来る主婦が良い主婦であるという認識をしている女性が自分の出来なさに笑いという手段で対抗し、答えているということがわかる。これまでの分析を踏まえた上で田中は『『情報番組』に登場する主婦たちは、むしろ『主婦』の失敗例ばかりだと主張できるかもしれない。このように主張してみることで、完璧で過不足ない主婦など番組には見当たらず、より完璧に近いとされる主婦でさえ、『もっと頑張らなさい』と激励されつづける仕組みが前景化されるようになる。そして叱咤激励のなかではたしかに、『笑い』は、その対象となる人びとから闘争性を剥ぎ取り、彼女たちを従順な存在へと作りかえる効果をもたらしている」（田中 2012: 155）と指摘する。この指摘から女性是一方的な

ジェンダーステレオタイプの押し付けに対して、抵抗よりも従順でいることで求められた女性性を少しでも提示していることがいえる。ジェンダーステレオタイプからの逸脱行為を笑いに変えることは、根本的な問題である他者からの女性性の要求という部分を隠してしまっているのだ。

自身を卑下し、自虐する行為は主に女性に多く見られる。これは男性から勝手に評価対象にされる女性は男性が求めている「一般基準」をクリアしなかった際にクリアしている女性と比較され、貶されるという事実から読み解くことができる。これを先回りして相手から言わせないよう自ら回避する手段が自虐という行為だといえる。しかし自虐という行為、そして発言自体には自分自身を自分で卑下し、貶す意味を持つ。そのため自己肯定感を低め、「女性らしさ」基準に常に怯えながら先回りして自虐発言してしまっているのである。これは一見してジェンダーステレオタイプから離れたところに位置しているように見えるが、「女性らしさ」の価値基準によって男性から評価を受ける際に女性自身が行なう自虐行為は、男性が高評価を与える女性像を女性自身が持っていなければ行なうことが出来ないのである。男性から高評価を受ける女性に自分自身は程遠いと感じながらも、どの基準が男性に称賛されるのかという判断は出来ていなければならないからである。そのため女性自身が行なう自虐発言という行為は女性自身がジェンダーステレオタイプの再生産に加担してしまう行為であるといえる。

ただ先述したつづ井の note に対して「価値観の押し付け」と受け取った女性も同時に存在しており、「自虐をやめたい(やめよう)」と発信することすら批判対象になり得るのだ。このことから「新たな女性像」の提示について第 4 章では論じていく。

#### 第 4 章 女性アイドル像からみる自分らしさと女性らしさの狭間：『青春有你 2』を軸に

女性性が要求され偶像性を内包するメディアコンテンツ像の 1 つとしてこの章では女性アイドル像におけるジェンダーステレオタイプの再生産との関連性について論じていく。女性アイドルといっても日本のみならず様々なタイプの女性アイドルが海外には存在している。今回の分析には 2020 年 3 月から中国番組配信サイト iQIYI(愛奇芸)で配信された『青春有你 2(Qīngchūn yǒu nǐ) : Youth with you 2(英題)』を用いる。

まずは『青春有你 2』についての概要を説明したい。『青春有你 2』は韓国発のサバイバルオーディション番組『PURODUCE 101』の中国版ともいえる番組である。以前中国では男性版の『Idol Producer』『青春有你』があり、今回はその女性版として放送が始まった。訓練生 109 名が番組内で課される課題をそれぞれ披露し、その過程を視聴者は見届け、訓練生たちに票を入れていく。そして徐々に訓練生が選別されていき、最終的に 9 名が選ばれ、新たなグループとしてデビューするまでが番組としての流れである。よくあるサバイバルオーディション番組だと番組が開始される前は思われていたが、実際に番組が開始されるとすぐさま話題になった。それは番組のコンセプトテーマとして「無限の可能性」を示す「X」が設定されており、従来の女性アイドルグループではなく多様性を重視した新たな女性アイドルグループを誕生させることを目指すものであったためである。

様々な過程を経て集まった訓練生たちは決して 1 つにまとめることが出来ない個性の強さによって私たち視聴者が持つ固定化された女性アイドル像を揺さぶり、番組を通して新たな女性アイドル像を提示したのだ。様々なバックボーンを持ち既に女性アイドルとして活躍している訓練生やシンガーソングライターとして活動している訓練生まで幅広く参加し、女性アイドルの評価基準とされる容姿だけを見ても正統派アイドルとされているような子からマニッシュなベリーショートの子で派手なメイク、アフロヘアの子、ボーイッシュな子など視聴者たちが今までのアイドルオーディションで見てきたような女性像の提示ではなかったのである。この第 4 章では『青春有你 2』から「自分らしさ」を追及と「女性らしさ」の否定と抵抗を日本の女性アイドルと比較しながら分析し、女性像のジェンダーステレオタイプを女性アイドル本人だけではなくファン側も加担してしまっていた過程を分析していく。

#### 4-1 日本の女性アイドルの幼さとその対比

番組内ではまず始めに A クラスから F クラスまで能力別にクラス分けを行なうために、既に組んでいるユニットで参加している訓練生たちや個人参加している訓練生がそれぞれのテーマに沿って 4 名のメンターを前にオーディションに挑戦する。そして個人の能力ごとにランク付けされたのちそれぞれ振り分けられる。次々と訓練生たちがパフォーマンスを披露していく中で、日本の AKB48 グループの上海版である AKB48 TeamSH の沈莹

(Kuliko Shen)と胡馨尹(Anne Hu)のパフォーマンスの順番が回ってきた。

図①



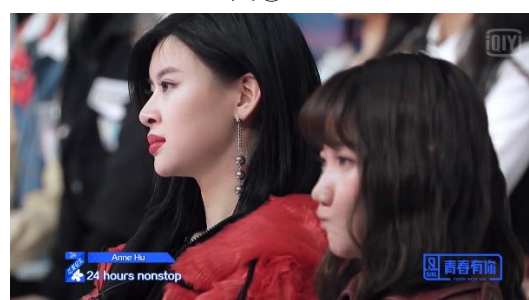
図②



図③



図④



2人はEP3でAKB48のヘビーローテーションの中国語版を披露した(図①)。もちろん振り付けは日本版のままで審査員に披露した。彼女たちがパフォーマンスする中、メンター同士で話す映像が流れ、その中でRAPメンターの1人であるJony J(図②右の人物)は彼女たちのパフォーマンスを見て、「まるで子どものようなパフォーマンスだ」と言ったのである。ここで披露されたものは日本のAKB48と人数は異なるものの、振り付けも完璧で日本のテレビ番組で披露すればこのようなことは言われることはない。パフォーマンスを見守っている同じ訓練生も彼女たちのパフォーマンスを見て楽しんでいる様子の訓練生もいれば(図③)、楽しんでいる様子ではなくただ見つめている様子の訓練生(図④)が映し出された<sup>9</sup>。いわゆる日本の女性アイドルの可愛らしさを同じ訓練生たちが楽しんでいる部分もあるが、この番組に集まった訓練生たちは既成概念に囚われずそれでも女性アイドルを目指している多様なメンバーである。傍から見れば幼く、子どもっぽいと思われる振り付けと楽曲に対

<sup>9</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep3 Part2 Esther Yu's performance on the rating stage stunned KUN」 (<https://www.iq.com/play/19rww8131g>) 2020.12.5 閲覧.

して好意的ではない印象を持っているように映し出されるのは自明である。このシーンに日本の女性アイドル像と中国の女性アイドル像で求められているものが違うという事実を見ることができる。

冒頭で述べたようにこの番組のコンセプトテーマは「X」であり、女性アイドルといっても一括りにできないくらい個性的なメンバーの集まりであった。それぞれダンスが得意であったり、歌に特化していたり、容姿に関しても本当に様々な訓練生が存在しており、一見すると同じグループとしてまとめることができないようにも見えた。参加している 109 人の訓練生たちはそれだけ番組のテーマに沿ったラインナップともいえるが、AKB48 TeamSH の 2 人がメンターにも同じ訓練生たちの評価も二分されていたことから、パッケージ化された幼さや未熟さを許容する多様性はなかったといえる。酒井順子は日本における女性の容姿を評価する際の言葉について「なぜ『かわいい』は『きれい』や『色っぽい』、はたまた他の賞賛ワードを凌駕するのかといえば、日本が幼形愛好の国であるからと思われます。なぜかは知らねど、古より成熟したものに比べ未熟なものが愛されるからこそ、『かわいい』には価値がある」(酒井 2020: 140)と語っている。酒井が指摘するように日本では女性に対して「かわいい」と表現することが他の言葉と比べて称賛の度合いが高く、未熟なものを愛でることが多い。そして日本の女性アイドルは未熟さや不完全さがあることがファンの応援するポイントになり、応援することで彼女たちが成長していく過程を楽しむ風潮がある。しかし韓国や中国国内のアイドルは男女問わず、実力がまずあってから完璧なパフォーマンスを要求し、それをファンたちは応援し楽しんでいるのである。そのため番組内では幼く、子どものパフォーマンスのように見える AKB48 の振り付けを披露したことで、結果として D 評価となり良い評価というものが得られなかった。この事実はファンが要求する女性アイドルとして実力や容姿が国によって異なることを示しているといえる。現在日本では韓国からサバイバルオーディションの源流を汲み、JO1<sup>10</sup>や NiziU<sup>11</sup>などがデビューしているが、女性アイドル業界の覇権を握っているのは秋元康がプロデュースする 48 グループや坂道グループであり、どこか実力が足りなくても応援したくなってしまう要素が残された幼くも大人っぽい部分も垣間見える女性アイドルが好まれているのだ。

2 人のパフォーマンス披露のエピソードからわかることは番組内でステレオタイプに縛

---

<sup>10</sup> 日韓合同プロジェクト『PRODUCE101 JAPAN』から誕生した男性グループ

<sup>11</sup> 韓国の大手芸能事務所 JYP エンターテインメントと日本のソニーミュージックによって行われた『Nizi Project』から誕生した女性グループ

られない新たな女性アイドルグループの誕生を目指す同番組は彼女たち自身のパフォーマンスを許容することはしなかったということである。「新たな女性アイドル像」を獲得し、9人でデビューするまでを追う同番組では沈莹(Kuliko Shen)と胡馨尹(Anne Hu)が提示した女性アイドル像を様々なバックグラウンドを持つ訓練生たちの中の1つの個性として扱うのではなく、それを否定することでメディアコンテンツ内のひいては中国国内で要求される女性アイドル像を要求しているといえる。

その事実を逆説的に捉えると、日本的女性アイドル像が今までのジェンダーステレオタイプに縛られた旧来の女性アイドル像であり、それが否定されたとも考えられる。沈莹(Kuliko Shen)と胡馨尹(Anne Hu)が提示した彼女たちの個性(キャラクター)はAKB48グループのシステムに則ったものであり、日本的な女性アイドルが縛られている「女性らしさ」である。そしてそれは本来彼女たちが持つとされる「自分らしさ」を欠いたものであるとされ、実力をつけて自分らしさを獲得する／自分と向き合うことがこの番組内で求められたのである。しかし既に109人が揃っている時点で個性は様々であり、2人が提示した個性も訓練生たちが皆提示する「自分らしさ」の1つに該当するはずである。けれど番組内でそれは肯定されなかった。この事実は2人が提示した「自分らしさ」を否定されたということでもあり、それと同時にAKB48グループのコンセプトが旧来の「女性アイドルらしさ」を提示するものであるという視点から読み取ることが可能である。日本において女性アイドルに求められている幼さによる「かわいさ」やそれに伴う「未熟さ」に2人が同一化することで、彼女たちは「日本的な女性アイドルらしさ」に囚われているだけではなく「自分らしさ」まで縛られてしまっている。そのため周囲から要求されている「日本的な女性アイドルらしさ」から解放されることで「自分らしさ」を手に入れられることができるとされるが、2人が「自分らしさ」として捉えているキャラクターを他者が否定することで、新たな「自分らしさ」を要求がなされてしまっているといえる。これは「女性らしさ」の否定でもあり同時に「自分らしさ」も否定されたことになる。

以上のことからわかることは、「新たな女性アイドル像」と「自分らしさ」の区別が当事者本人ではなく他者からの判断によってなされているということである。番組として多様性を目指しながらキャラクターを許容しないことで彼女たちに「新たな女性アイドル像」を獲得することを求め、それは日本的な女性アイドルが未だジェンダーステレオタイプに縛られた「女性らしさ」の否定に繋がる。ただ2人がその「女性アイドルらしさ」を「自分らしさ」として彼女たち自身がそれを披露していた場合、今度は「自分らしさ」が否定されたと



いうことになり、「正しい女性像」が他者によって要求されたことになる。このことから女性自身が持つ女性像は「女性らしさ」ともいえるものを内包しながら、それを「自分らしさ」として捉え、その「らしさ」ですら他者によって判断されてしまうということがこのシーンから解読することが可能であるといえる。

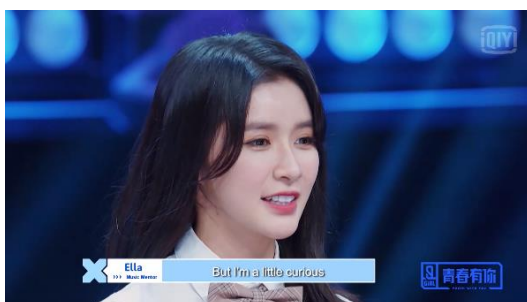
#### 4-2 女性アイドルの処女性

4-2 では日本国内で求められている女性アイドル像と異なり、子どもらしさや幼さよりも技術面に対する完璧なクオリティーが求められることで他者によって「自分らしさ」を否定され同時に新たな「自分らしさ」を要求されていることを先述した。そしてこの節では番組が始まってから番組内でも触れられていた蔡卓宜(JOEY CHUA)の離婚報道の取り上げ方から女性アイドルの処女性の要求について考察していく。

マレーシアから参加していた蔡卓宜(JOEY CHUA)は番組に参加することが発表になった際に実は過去に極秘結婚をしており、そして離婚していたという情報がインターネット上に流出した。これから女性アイドルのオーディションを受けるというときのスキャンダル報道であったが、これを視聴者たちは女性アイドルにふさわしくないとして彼女について批判的なコメントをインターネット上に書き込んだのである。

番組側としては彼女の一件について番組の外で起きていたことであり、彼女自身の事情でもあるため番組内で触れないという選択も出来たはずなのである。しかしこの番組ではEP2 で音楽メンターである Ella が彼女自身に直接質問を投げかけたのである。

図⑤



図⑥



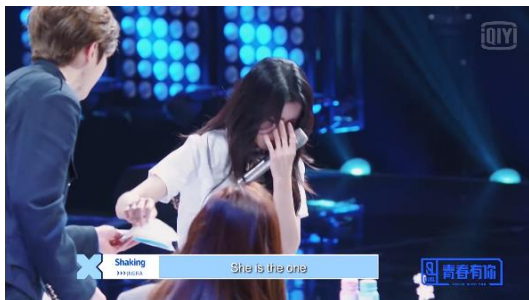
图⑦



图⑧



图⑨



图⑩



图⑪



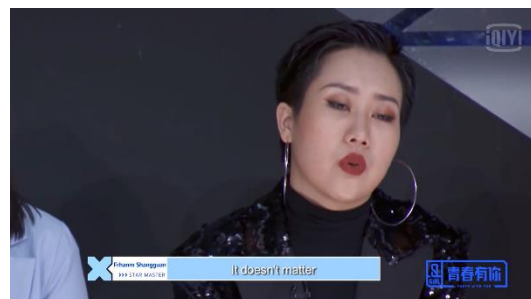
图⑫



图⑬



图⑭



[ I ]

*Ella : But I'm a little curious I heard before you came here. You were stressed because of some comments. It was a big blow, wasn't it.*

*JOEY CHUA : It's When I came there are a lot of people on the Internet saying that you. I thought I wouldn't say.*

*Shaking : She is the one.*

*Road Xu : How stress would she be, you think.*

*JOEY CHUA : Thank you, mentors. The comments in the Internet said you have been through<sup>12</sup> something. These things. Why do you come to such a young program.*

*Shaking : I get it.*

*JOEY CHUA : Many girls may have similar experience. But what I want to say is All my experiences, including today I am in class F make sense. I just want to tell you to ignore it. I live in this age with advanced information network. But I don't live in comments at all. So love yourself and be yourself. Go ahead bravely.*

*Trainee : Go ahead bravely. Keep fighting.*

*Frhanm Shangguan : It doesn't matter.<sup>13</sup>*

*Ella : でも、ここに来る前に聞いたことは少し気になります。あなたは多くのコメントでストレスを感じていました。大打撃でしたね。*

*JOEY CHUA : 私がここに来たとき、インターネット上に私のことを言っている人がたくさんいます。私は言わないでおこうと思っていました。*

*Shaking : 彼女はかけがえのない人です。／彼女は特別な人です。*

*Road Xu : (彼女は) どれほど辛かった [ストレスを抱えていた] ことでしょうね。*

*JOEY CHUA : メンターのみなさん、ありがとうございます。インターネット上のコメントによると、あなたは何かを経験<sup>14</sup>してきたとのことです。それなのになぜ*

---

<sup>12</sup> [sic]

<sup>13</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep2 Part2 The first contestant who gets an A」 (<https://www.iq.com/play/19rxa9s60o>) 2020.12.5 閲覧.

<sup>14</sup> 注 12 を through に改めた上で表記

こんなに若いプログラムに参加するのですか、と。

*Shaking*：ああわかります。

*JOEY CHUA*：多くの女の子が同じような経験をしているかもしれませんが、私が言いたいのは、今日を含むすべての私の経験は意味があるということです。余計なことは無視するように言いたいだけです。私は高度な情報ネットワークでこの時代に住んでいます。でも私はコメントの中には全く住んでいないので、自分を愛し、自分らしくいたいのです。勇気を持って進んでいきます。

*Trainee*：勇気を持って進んでください。戦い続けてください。

*Frhanm Shangguan*：何も問題はないよ。／気にしないでいいよ。<sup>15</sup>

パフォーマンス終了後にそれぞれのメンターが彼女に対してコメントする中で、蔡卓宜(JOEY CHUA)は笑顔を絶やさずにそのコメントを聞いていた(図⑤)が、Ella から彼女に起こっていることについて質問を受けたあと(図⑥)マイクを強く握りしめる手元がフォーカスされ(図⑦)、彼女は泣き出してしまった(図⑧⑨)。そして海外勢として共にクラス分けのパフォーマンスに挑んだ日本から参加していた七穂が蔡卓宜(JOEY CHUA)を支えている様子も映し出された(図⑧)。その後泣き出してしまった蔡卓宜(JOEY CHUA)にティッシュを差し出す蔡徐坤(KUN)(図⑨)、彼女が抱えてきたものを想像し語る徐紫茵(Road Xu)(図⑩)が映し出された。蔡卓宜(JOEY CHUA)が語ったインターネット上の意見について谢可寅(Shaking)が過去に彼女自身も似たような経験をしたかのように彼女に対して理解を示した(図⑪)。そして蔡卓宜(JOEY CHUA)が拳を突き上げ語った彼女(図⑫)自身の強い意志に他の訓練生が共感し泣いている様子(図⑬)や他の訓練生たちが皆で励ます様子(図⑬)も同時に映像には映された。そして最後に上官喜愛(Frhanm Shangguan)が彼女に起きたことを「何も問題ではないよ」と呟いたところがピックアップで映された(図⑭)。

この一連の流れは常に笑顔を絶やさずニコニコしている彼女が自分に対して向けられた批判について涙し、同性の女性に支えてもらっている図とその彼女に対して異性である蔡徐坤(KUN)がそっと涙を拭くためのティッシュを差し出す彼の優しさを同時に映し出している。笑顔や並みだといった「女の武器」と捉えられかねないものを映したのちに、蔡卓宜(JOEY CHUA)は涙ながらに拳を突き上げ、自分の意思を表明する姿はある種の「男らしさ」と捉えることが出来るといえる映像が映し出された。

---

<sup>15</sup> 和訳は筆者による。以下、番組のセリフの和訳はすべて筆者自身による。

[II]

JOEY CHUA : Sorry.

Ella : Joey, we don't know what you've been through. You wouldn't tell. But I think it doesn't matter. Everyone has their choices. You don't have to respond to those comments. Because this is your life. You are living your life. <sup>16</sup>

JOEY CHUA : すみません。

Ella : JOEY、私たちはあなたが何を経験したのかわかりません。あなたは言わないでしょう。しかし、それは問題ではないと思います。誰もが選択できます。あなたはそれらのコメントに答える必要はありません。これはあなたの人生だから。あなたはあなたの人生を生きています。

Interview(Ella) : People questioned whether she met the standards of the women's team. It's true that the public have some requirements for the women's team. Sweet, lovely with few social experience. They are shaped very similar. But who says girls have only one look. We girls can change a lot. So this will make me want to think and say that on earth in Youth with you 2. What kind of women's team are we going to make. I think we must break this thinking. And then let the women's team have an evolution.<sup>17</sup>

インタビュー (Ella) : 人々は彼女が女性チームの基準を満たしているかどうか疑問に思いました。女性のチームには一般の人々がいくつかの要件を持っているのは事実です。社会的な経験がほとんどなく、甘くて素敵です。でも、女の子がみんな同じだなんて、ありえません。私たち女の子は大きく変わることができる。これは私が青春有你 2 における地球上でそれを考えて言いたいと思うでしょう。どんな女性チームを作っていくのか、この考えを打ち破って女性チームを進化させて

---

<sup>16</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep2 Part2 The first contestant who gets an A」 (<https://www.iq.com/play/19rxs60o>) 2020.12.5 閲覧.

<sup>17</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep2 Part2 The first contestant who gets an A」 (<https://www.iq.com/play/19rxs60o>) 2020.12.5 閲覧.

いかなければならないと思います。

I と II を通してわかるのは女性アイドルに求められる純潔さ、いわゆる処女性について世間から非難を受けてもなお、彼女は笑顔を浮かべていたことである。Ella から言及を受けてからすぐに泣きだした彼女はその批判から来るストレスを覆い隠すための笑顔を浮かべていたことが読み取れる。そのため同じ訓練生である徐紫茵(Roada Xu)は彼女自身が抱えてきたストレスに対する言及をし、番組側はそれをあえて映像に映しこんでいる。谢可寅(Shaking)についても同様に彼女自身もこのサバイバルオーディションが初参加というわけではなく、以前別のオーディション番組に参加していたことがあるため蔡卓宜(JOEY CHUA)と抱えている背景は異なるものの、インターネット上で彼女自身もまた様々な言及を受けていたため彼女に対して同意するような反応をし、番組ではこれだけ大勢訓練生がいる中でピックアップして映し出された。そしてここで映し出されたシーンで蔡卓宜(JOEY CHUA)は自身が受けている批判やその事実について一切話さないことを決めていたことを語っているが、これはある種の「諦め」であり、今まで理不尽な批判に対して「反抗する場」自体が設けられることがなかったともいえる。

そのような中で Ella が彼女に語る言葉は Ella 自身の経験が反映されているといえる。Ella は 2001 年結成の S.H.E という女性アイドルグループに所属しており、今のアイドル時代とは異なるもっと前から女性アイドルとして活躍してきた。インタビューで Ella は人々が持つ女性アイドルのステレオタイプ像について言及している。人々が女性アイドルのことを社会について深く知らない甘くて素敵な存在として捉えていることに触れ、皆が同じではないと言い切っている。極秘に結婚して離婚までしている蔡卓宜(JOEY CHUA)を否定するのではなく、あえて彼女自身に人々からの批判の声について番組内で取り上げ、そこで彼女自身の意思を示させることで今までのジェンダーステレオタイプを跳ね返す場所を提供したのである。これは番組が前提として掲げているテーマと即するものであり、ここで Ella があえて言及し、彼女が抱えていることに対して批判を行なってしまうとその前提が崩れることになる。蔡卓宜(JOEY CHUA)が批判を受けてもなお笑顔でい続け、批判を受けている事実を隠し通してしまっていたらこれもまた従来の女性アイドル像を肯定することに繋がり、番組のテーマが守られないことになる。ここで批判を跳ね返す「場」が提供され、実際に跳ね返す意思表示を行なうことで彼女自身が持っていたジェンダーステレオタイプも打破することができる。



この女性アイドルに対する処女性の要求について日本の女性アイドルを見てみると、前提として恋愛禁止が掲げられており、それを違反したものに対しては社会的糾弾を受けることになる。2013年にAKB48のメンバーである峯岸みなみが恋愛報道を受け、髪を剃髪し頭を丸めるという日本的な謝罪したことはその当時インパクトがあまりにも強く話題になったが、女性アイドルに求められる恋愛禁止のルールと純潔さの要求はそれだけ強いということである。日本国内で男性アイドルとして最もメジャーであるジャニーズ事務所に所属するタレントは一定の年齢になれば結婚もするが、女性アイドルは女性アイドルでいられる期間が男性アイドルと比べると短く、それだけに何色にも染まっていないピュアさが求められている。これは第2章で考察した女性に求められる「若さ」と「年相応」の要求と関連しているといえる。実際に蔡卓宜(JOEY CHUA)はEllaからの言及後、インターネット上での意見を述べている際にファンからの彼女に対する若さへの言及がなされているのがわかる。彼女はこの番組に参加していた際は25歳であり、ファンから「若い子が参加する番組に出るなんて」という批判も受けていたのである。

この蔡卓宜(JOEY CHUA)の一連の流れを分析していくと、本来であれば咎められることではないはずの恋愛について女性アイドルとしてふさわしくないという批判を受け、そのことに対して笑顔を浮かべ言及するつもりもなかった彼女は自分自身の中で女性アイドルらしさというものを持っており、あえて反論するという行動も取らないようにしていたことがわかる。仮に番組側、ひいてはEllaが彼女に対して反論する「場」を設け、彼女の口から語ることをさせなかったとしたら、彼女は今までの周りから求められるジェンダーステレオタイプの女性アイドル像を抱えたまま、このオーディションを進めていくことになっていたといえる。彼女が番組内で行なったジェンダーステレオタイプに対する抵抗とインターネット上における彼女への批判を踏まえると、女性アイドル像の処女性の要求に対し反抗しないことで女性自身がジェンダーステレオタイプの再生産に加担してってしまう要因の一つに繋がるといえる。

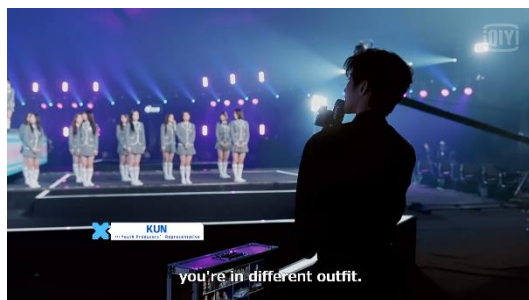
#### 4-3 『青春有你2』における制服とボーイッシュ

『青春有你2』の番組コンセプトテーマである「X」に基づき、番組側はサバイバルオーディションでは慣例である訓練生たちの制服をスカートのみとするのではなく、パンツス

タイルも選択することを可能にした。そしてその「X」をコンセプトテーマに掲げ、従来の縛りに囚われない女性アイドルグループの誕生を目指す『青春有你2』の元に集まった訓練生たち 109 人中 6 人がパンツスタイルでオーディションに挑んだ。女性アイドルの衣装については日本の女性アイドルも韓国、中国の女性アイドルたちも制服といえば女性のアイコンとしてスカートであることが多い。現代社会においては女性もパンツスタイルを着用しているが、女性性の象徴のような存在である女性アイドルは女性の服の象徴であるスカートを着用することが一般的とされていたし、ある種強制的にスカート姿の女性アイドルがスタンダードであった。そこでこの 4-3 では投票権を握っている視聴者の「女性アイドルはスカートを履く」というステレオタイプを揺るがす出来事であった旧来の女性アイドル像の打破ともいえる訓練生の制服の選択制の導入から、表題曲センターを務めパンツスタイルを選択した 1 人である刘雨昕(XIN Liu)の発言をピックアップし、分析を行なう。

EP8 で最初のレベル分けを経て番組の表題曲のセンターを務めることになった刘雨昕(XIN Liu)が、全体の MV 撮影が終わると番組の進行役であり代表メンターである蔡徐坤(KUN：図⑮⑯)に質問を受ける場面が映し出された。

図⑮



図⑯



図⑰



図⑱





図19



図20



図21



図22



図23



図24



[ I ]

*KUN : XIN, you're in different outfit. Are you stressed out?*

*XIN : Yes, I actually am. I was thinking about if I should wear skirt, but I think This show is also about "X" it's unknown and I want to continue to be true to myself. So I wear pants.<sup>18</sup>*

*KUN : XIN、あなたはみんなとは違う服を着ています。ストレスが溜まってない？*

<sup>18</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep8 Part2 LISA becomes a tough mentor」 (<https://www.iq.com/play/19rwtrp7ik>) 2020.12.5 閲覧.

XIN：はい。私はスカートを履くべきと考えていましたが、このショーは「X」については明確ではないし、私は自分に忠実でありたい。だから私はパンツを着ます。

この問いかけに対し答えた刘雨昕(XIN Liu)の「スカートを履くべきと考えていた」という発言(図⑮)から彼女自身の中に女性アイドル像のステレオタイプが存在していたことがわかる。刘雨昕(XIN Liu)はこの番組に参加する前に同じく訓練生である孔雪儿(Snow Kong)と共に蜜蜂少女隊(Lady Bees)という女性アイドルグループに所属しており、解散を経験していた。EP19では番組のセクションの中で今までストレスに感じたことはという質問に問いかけを投げかけられ、彼女はボーイッシュさを貫いた結果ファンからそのイメージのせいでグループは解散したと言われたこと挙げている<sup>19</sup>。その背景を踏まえ、女性アイドルはスカートといういわゆる固定化されているイメージは彼女自身が以前女性アイドルグループに所属していたことも関係しているといえる。

図⑮



## [ II ]

*Interview(XIN) : Whether girls like me can be a member of a girl group, I think, is a topic discussed in the last century, so I will do my best to be the center position of the theme song. No matter how many doubts there will be, I'm sure about one thing that I have to be true to myself. I think girls from Class A can do any style. And*

---

<sup>19</sup> iQIYI(爱奇艺), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep20 Part1 KUN Announces TOP 1 of the 3rd-time rankings」 (<https://www.iq.com/play/19rxxxubb4>) 2020.12.23 閲覧.

*courage is my only response.*<sup>20</sup>

インタビュー(XIN): 私のような女の子がガールズグループの一員になれるかどうかは、前世紀の話だと思っている。だから私はテーマソングのセンターポジションとしてベストを尽くしたい。どんな疑念があったとしても、自分には正直でなくてはならないことが1つあると確信している。Aクラスの女の子はどんなスタイルでも出来ると思う。そして勇気が私のたった一つの反応です。

Iのシーンから画面が切り替わり、蔡徐坤(KUN)から質問を受け、収録現場にいる場面から切り替わり、刘雨昕(XIN Liu)の練習着でのインタビュー映像が流された(図②⑤)。ここでは彼女が振り分けられた一番上のレベルであるAクラスに割り振られた同じ訓練生たちに触れつつ、その中でセンターに選ばれた彼女は彼女に向けられた批判に対して勇気をもって取り組む姿勢を示した。これは先に刘雨昕(XIN Liu)自身が持っていた女性アイドル像についての言及を蔡徐坤(KUN)がした質問によって暴かれ、次に刘雨昕(XIN Liu)のインタビュー映像に切り替わることで視聴者たちは彼女自身の変化を感じることができる。このインタビュー映像の中で刘雨昕(XIN Liu)自身が女性アイドル像のステレオタイプを一蹴し、世間の批判的な声に対して彼女の意見を表明したのである。

図②⑥



図②⑦



[III]

*KUN : XIN, you don't have to care others' opinions. It's fine if you feel stressed out.*

---

<sup>20</sup> iQIYI(爱奇艺), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep8 Part2 LISA becomes a tough mentor」 (<https://www.iq.com/play/19rwtrp7ik>) 2020.12.5 閲覧.

*I will be here with you.*

*XIN : Thank you.<sup>21</sup>*

*KUN : XIN、あなたは他人の意見を気にする必要はありません。ストレスを感じても大丈夫です。私はあなたと共にいます。*

*XIN : ありがとうございます。*

そしてここで再度収録現場の映像に切り替わり、蔡徐坤(KUN)が刘雨昕(XIN Liu)に対して返答をしている(図②⑥)。構図として彼女を含め、他の訓練生たちは舞台上におり、舞台下から蔡徐坤(KUN)が刘雨昕(XIN Liu)に対して問いかけを行なっている画になっている(図②⑦)。そして蔡徐坤(KUN)が刘雨昕(XIN Liu)にかけた言葉は何か良くないことをされたことに対して守ってあげるや助けてあげるといったことではなく、彼女と共にいるといったあくまで味方であって対等な立場から投げかけた言葉である。

これら I から III にかけてわかることは数々の女性アイドルグループが存在する中でそれだけ異なったコンセプトがあるはずであるが、視聴者が持つ「女性アイドルグループらしさ」は共通しているということである。実際に刘雨昕(XIN Liu)以外にパンツスタイルを選んだうちの 2 人、陆柯燃(K Lu)と林凡(Marco Lin)は 2 人を含む中国出身の 4 人で構成されている FanxyRed というジェンダーレスグループに所属しており、彼女たちは主に韓国で活動している。日本でも風男塾という男装をしている女性アイドルグループ的存在が存在している。このように女性アイドルグループのコンセプトとして男装をしていたり、ユニセックスな衣装を着ていたりする女性アイドル的存在がいても、それは 1 つのキャラクターとして扱われているだけである。そのため刘雨昕(XIN Liu)に対して視聴者たちはグループのセンターというグループの顔となるポジションに「女性らしくない」存在が立つということをふさわしくないと判断したのである。

ここで 1 つ考えられるのはボーイッシュと形容される女性や男装している女性に対して歓声を上げるのは彼女たちと同性の女性ということである。実際に番組内では刘雨昕(XIN Liu)や陆柯燃(K Lu)、そして林凡(Marco Lin)は女性でありながら、他の訓練生からは「異

---

<sup>21</sup> iQIYI(爱奇艺), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep8 Part2 LISA becomes a tough mentor」 (<https://www.iq.com/play/19rwtrp7ik>) 2020.12.5 閲覧.

性的」に見られていた。彼女たちがパフォーマンスを行なうと、他の訓練生からは黄色い歓声が上がり、観客もまた女性が多い中で彼女たちの名前が入ったプレートを掲げ応援に駆け付けていた。日本では宝塚歌劇団の男役に代表される、女性が女性を疑似恋愛的に楽しむという文化が存在している。この文化とは反対に「男の娘」と形容されるような女性に見える男性がアイドルグループに所属し、男性が応援する構図が存在していないのである。女性だけの空間に女性がそれを内輪のみで楽しむ。その空間からは男性は排除されており、関与していないのである。そこで男社会のホモソーシャルにおいてミソジニーとホモフォビアは同時に共有化されている概念を踏まえると、男装している女性は見た目だけ見ると男性であり、彼女を応援することはホモソーシャルにおける規範を逸脱することになってしまい、「男の娘」は見た目が女性に見えても男性という事実からは逃れられず、これもまた規範違反となってしまふといえる。ボーイッシュと形容される刘雨昕(XIN Liu)が女性アイドルグループのセンターに立つことで提示した新たな女性アイドル像と視聴者(ファン)に対する訴えかけは女性アイドルらしくないという人々には届かないのである。

そのため刘雨昕(XIN Liu)が蔡卓宜(JOEY CHUA)と同じく視聴者に対して行なった意思表示とジェンダーステレオタイプに対する抵抗の提示は、結果として女性のコミュニティの中だけで共有されるものになってしまい、彼女自身のカウンターは意味をなさないのである。

#### 4-4 女性同士の団結と戦い「女の敵は女」理論

「女の敵は女」という常套句が語られることは多い。テレビ番組などでも度々テーマとして取り上げられている。女性同士が多く集まるコミュニティでは女性が女性に対してやっかみ、いじめなどが起きるといふ共通認識が存在している。では男性同士ではどうだろうか。「女の敵は女」に対応する「男の敵は男」という常套句がなく、男性同士には争いがないようにみえる。「女の敵は女」という言葉が存在し、その状況を複数人で共有しエンタメとして楽しむ構造が生まれているこの現状から目を背けることは出来ない。

その一つの要因として女性に対するジェンダーステレオタイプが考えられる。女性同士の争いは世間の格好の話題になりやすい。そのため女性同士の争いを面白おかしく取り上げる番組も存在している。女性という本来社会的に弱い立場に属しているとされる人々が



弱いながらに様々な手段を使い、女性同士の争いを助長させていく展開が男性同士の争いとは用いる手段が違うからこそ怖い側面があり、メディアコンテンツで取り上げる際にもその怖さが面白さとして反映されているといえる。だからこそ伝統的女性に対し非伝統的女性が嫌う構図というものはメディアコンテンツ内では何度も映し出されてきた。

『青春有你 2』では女性のみが閉鎖的な場所で約半年間生活し、共同生活を送ってきた中でいわゆる女性同士の争いというものが一切映し出されなかった。むしろデビューのためのその限られた椅子を目指す共に戦う同志のような関係性で映し出されたのである。この番組はサバイバルオーディションであるため各エピソードにおける課題曲のパフォーマンスメンバー決め際にはお互いの匿名投票によって決めたり、センターをその曲に最もふさわしいと思うメンバーを据えさせたりするなど争わせる要素はあった。しかし彼女たちは世間が思う「女の戦い」をせず、彼女たち自身の互いの対話と尊重を主軸に番組は進んでいった。互いに支え合い争わずに解決するということがむしろ女性性の提示であるという観点からみることができるかもしれないが、こうした女性のみで限られた椅子を奪い合う構成の中で争うシーンが一切なかった、もしあったとしてもそれを一切映さなかったという点にここでは一度注目したい。

EP16 では番組撮影当初、番組に参加する不安からずっと不機嫌で過ごしていた乃万(NINEONE)に対して撮影終了後、寮の部屋に戻ると匿名で彼女を気に掛ける手紙が机に置かれていたことに触れ、まだあのとき手紙をくれたあなたがいるなら教えてほしいと問いかけ、それが上官喜愛(Frhanm Shangguan)であったことが明らかになるエピソードが流れた<sup>22</sup>。EP17 では各楽曲が 7 名ずつしかパフォーマンスが出来ないという制約の中でまずはメンターによる選別が行なわれ、その後 8 名が残る形で 7 名を決めるための訓練生同士の投票が行なわれた。必然的に選ばれない 1 人が出てしまう中で選ばれなかった訓練生は涙した。しかし他の 7 名が選ばれなかった訓練生を皆で抱きしめ、互いに応援しあう映像が流された<sup>23</sup>。そして EP19 ではガールズタイムというパートの中でメンターの Ella と LISA が訓練生たちの情報を匿名で語り、ガールズトークが繰り広げられるパートが放送された。

---

<sup>22</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep16 Part1 KUN chokes with sobs as he recalls the past」 (<https://www.iq.com/play/19ry4g5c9c>) 2020.12.23 閲覧.

<sup>23</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep17 Part1 Theme assessment public show begins!」 (<https://www.iq.com/play/19ryatqoig>) 2020.12.23 閲覧.

そこで様々な訓練生たちの番組では映されていない裏話が暴露されていく中で、出てきたエピソードは张钰(Yu Zhang)が実力による振り分けではなく、視聴者の投票数によって A クラスから D クラスになった上官喜愛(Frhanm Shangguan)がみんなのリーダーとなってサポートしてくれたことに対して感謝を述べる部分があった<sup>24</sup>。このように番組内では争わせるためのルールは存在していても、訓練生同士のギスギスした様子が映し出されなかったのである。

サバイバルオーディションはあくまでリアリティーショーであり、どの部分を映し、どのような演出をするのかというものは番組の制作側の意図によって変わってくる。韓国国内で行なわれている『PRODUCE101』などではセンターのポジション争いをする事で世間が考える「女の戦い」を繰り広げる場面が映し出されるが、この番組内ではそういったシーンを一切映さなかった。109 人で 9 個の椅子を争っている状態で、互いを高めあい出来る人が出来ない人に教え、また出来ない人も出来ない側の視点に立って出来る側の人にアドバイスをする。そしてランキング発表が行なわれ、どんどん人数が減っていく中、訓練生たちがみな口を揃えて話したのは「自分のベストを尽くした結果」ということだった。自分自身と向き合い互いが互いのために努力した結果、自分に残ることが出来なくとも残った相手のことを想い涙するシーンが流されたのである。精神科医の水島広子は、「女の敵は女」と言われる現象におけるこの問題の本質は女性の陰湿さにあるのではなく、主に外見によって「選ばれる」という受動的な立場に置かれていることにあるとしている(水島 2014: 28)。水島がいう外見は容姿の美しさに留まらず、性的魅力や「女性らしい仕草」、「女性らしい細やかさ」であり、「女性らしい細やかさ」は一見内的なものに見えてマニュアル化できるものであり外的なものだとしている(水島 2014: 25-26)。これらを踏まえると彼女たちはサバイバルオーディションに参加している時点で、途中のパフォーマンス披露によって視聴者投票以外のベネフィット<sup>25</sup>を獲得できたとしても、既に選ばれる側であることから逃れられず「女の戦い」が映し出される環境が整ってしまっている。またこのサバイバルオーディションに共通する訓練生(韓国版は練習生)たちの番組表題曲には必ず「Pick me」というワードが入っており、それは候補者たちが選ばれる側であることを示すための言葉である。こ

---

<sup>24</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep19 Part1 LISA and Ella give a touching class」(<https://www.iq.com/play/19ry9vgim8>) 2020.12.23 閲覧.

<sup>25</sup> スマートフォンで視聴者が行なう投票以外のポイントのこと。グループ発表などのグループとしての評価などが加点のポイントになる。

のことからも彼女たちが視聴者たちから選ばれる側であることを読み取ることが出来る。だが『青春有你2』の表題曲『YES!OK!』<sup>26</sup>には「Pick me」と共に「和我一起吧(私と一緒に来て)」という歌詞が含まれている。そして番組内で行なわれるランキング発表の最後、訓練生たちは声を揃えてこの「和我一起吧(私と一緒に来て)」をスローガンのように何度も言って、こちら側(視聴者)に手を差し出す映像が必ず流されたのである。訓練生同士がこのサバイバルオーディションで闘い、高め合っていく姿と共に視聴者たちにそう投げかけることで、視聴者たちと彼女たちは対等な関係であり、選ぶ／選ばれるという関係性を超えようとしていた。これは視聴者側が要求する期待を跳ね除けるものであり、例え視聴者が想像するような「女の戦い」があったとしても番組に流さないことでジェンダーステレオタイプに対抗しているのであるといえる。

以上のことから彼女たち自身が提示してきたものは視聴者が期待する「女の戦い」という画を映し出さず、ジェンダーステレオタイプに屈しなかったということが読み取れる。しかし番組の演出上、こちら側に手を差し出して行なうパフォーマンスが存在し、投票権を握っている視聴者と対等な関係でいようとし、選ばれる側でいようとしなかった彼女たちは、実際には課題曲のグループ対決などで個人に対する投票も同時に行なわれているためグループメンバーにおいても得票数に差があり、その1票に一喜一憂し、涙する姿も同時に映し出されたのである。個人として獲得する票と課題曲をグループで行ない、現場参加した視聴者(ファン)による投票によるベネフィットを獲得するときの姿は完全に選ばれる側である彼女たちを映し出しており、視聴者と対等であろうとする演出と矛盾してしまっているのである。

練習している様子をそれぞれの部屋に設置されているカメラによって映し出されることで視聴者たちは彼女たちの努力している姿を知ることになる。そこで記録された彼女たちの姿は全て視聴者たちに提供されているわけではなく、制作側の意図をもって編集された映像が提供されている。そういった番組作りの中で韓国の『PRODUCE101』などに代表されるファンの間の中で用いられる用語の1つに放送分量と呼ばれるものがある。これは番組側が100人以上いる候補者を映し出す放送の分量のことを指している。『青春有你2』においても109人いる訓練生たちがほとんど平等に番組内で取り上げられたかといえ、そ

---

<sup>26</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「【SUB】 YouthWithYou 青春有你2: Theme song 'YES! OK!」 主题曲舞台《YES! OK!》 | iQIYI」 (<https://www.youtube.com/watch?v=TN6r5Z3oqLs>) 2020.12.24 閲覧.



うとはいえ偏りが見られた。映像に映し出された情報から視聴者は訓練生たちを選択し投票するため、番組内でどこを映し、そして映さないかという編集は彼女たちのたちの人生にも関わるほど大切な 1 票に影響が出てくることになる。お互い高め合う過程においてダンスバトルをするなどそういった戦い(バトル)はしたもの、「女の敵は女」という視聴者が期待する「女の戦い」を彼女たちは繰り広げなかった。しかし「女の敵は女」と呼ばれる要因ともいえる「選ばれる側」から逃れることは出来ず、彼女たちがどれだけ上手くパフォーマンスをしようとも視聴者の投票によって結果が変わってしまうという事実に一喜一憂する姿は投票している側である視聴者に対して映し出されており、「らしさ」を求めてくる視聴者と訓練生たちの選ぶ／選ばれるという関係性は変わらないものとして最後まで存在し続けたのである。

#### 4-5 当事者以外が構築する「らしさ」

これまで『青春有你 2』の番組で映し出された訓練生たちを通して、「女性アイドル像」の存在について考察してきた。女性アイドルを目指す彼女自身の中にある女性アイドルのステレオタイプ像やファン側が彼女たちに対して「女性アイドルらしさ」を要求し縛り付けてしまっている現状が見えた。『青春有你 2』は従来の女性アイドル像を打ち破る様が番組を通して提示することを試みた。女性アイドルという存在それ自体への私たち視聴者への問いかけであり、それでも女性アイドルとしてデビューを望む彼女たち自身への問いかけであったともいえる。

4-1 から 4-4 にかけて論じてきたこと全てに共通することは、女性アイドルとしてデビューしたいと望む彼女たちの中にもジェンダーステレオタイプが存在し、そしてそれは周りから要求されているジェンダーステレオタイプであるということである。

番組が佳境に差し掛かっている中に発表されたファッション誌『BAZAAR』とコラボレーション企画では、途中経過の上位 9 位までにランクインしている訓練生たちが New Rules について各々が女の子に対して周囲が求めて来るものに対するアンサーを提示し、それぞれ論破を試みている。



安崎(Babymonster An)が *They say, girls should be delicate. I say, it's more charming to be primitive and out of control. Do you agree?* (女の子は繊細であるべきと言います。原始的で手に負えないほうが魅力的だと私は言います。あなたは同意しますか?) と問いかけ、金子涵 (Aria Jin) は *They say, girls should be pretty. But I say, I will define what is pretty. you are so boring that you only call me pretty.* (女の子は可愛くいるべきと言います。でも私は私がかawaiiいものを定義します。あなたはとても退屈なので、私をかawaiiいと呼ぶだけです) と語り、许佳琪(Kiki Xu)は *They say, girls should be perfect. But I believe, if you can't accept my worst moment. You don't deserve the best of me.* (女の子は完璧であるべきと言います。しかし、あなたが私の最悪の瞬間を受け入れることができないならば、あなたは私の最高に値するものではありません) と断定し、赵小棠(Xiaotang Zhao)は *They say, girls should be simple. But I'm not. I'm not so simple that will be seen through.* (女の子はシンプルであるべきと言います。しかし、私はそうではありません。私は透けて見えるほど単純ではありません) と語り、刘雨昕(XIN Liu)は *They say, girls should be feminine. They say, girls should not be too handsome. I say, mistaking girl's coolness for being handsome is too shallow.* (女の子は女性らしくあるべきだと言います。女の子がハンサムすぎてはいけないと言いますが、女の子のかっこよさをハンサムと間違えるのは浅すぎます) と語り、喻言(Yan Yu)は *They say, girls should be gentle. Sorry, only my beloved ones can feel my gentleness.* (女の子は優しくあるべきだと言います。ごめんなさい、愛する人だけが私の優しさを感じることができます) と語り、谢可寅(Shaking)は *They say, girls should be obedient. According*

*to your tastes, am I forced to make some changes?* (女の子は従うべきだと言います。あなたの好みに応じて、私はいくつかの変更を強制されていますか?) と問いかけ、孔雪儿 (Snow Kong) は *They say, girls should be confident. But I think doubting myself is the beginning of becoming a better me.* (女の子は自信を持つべきだと言います。しかし、自分自身を疑うことは、より良い私になるための始まりだと思います) と語り、虞书欣 (Esther Yu) は *They say, girls should be standard. But what is the definition of standard? It's in my hand.* (女の子はスタンダードでいるべきだと言われています。しかし、スタンダードの定義は何ですか? それは私の手にあります) と語り、そして最後に *Girls can choose to be not obedient, not simple, not delicate, not up to public standards, not only pretty, not only gentle. We will cross out all the 'should be's and forget the rules. I make the decision for myself of become.* (女の子は従順ではないことを選ぶことができます。シンプルではなく、繊細ではなく、公的な基準に達しておらず、きれいであるだけでなく、優しくあるだけではありません。すべての「あるべき」を取り消し、ルールを忘れます。私は自分で決定します。) と締めくくられる。<sup>27</sup>

映像として映し出された全体の画面の色は黒と赤が使用されており、女性らしさと総称されるようなピンクが一切使われていない。そして彼女たちに施されているメイクも赤リップに黒のアイラインが引かれており、一目で強い女性とわかる演出がなされているといえる。そうした彼女たちによって女の子に対する周囲からのジェンダーステレオタイプの要求である繊細さ、かわいさ、完璧さ、素朴(シンプル)、女性らしさ、優しさ、従順さ、自信を持つこと(自己肯定感)、スタンダードさを明確に提示し、その周囲からの意見に対して「抵抗」が行なわれた。彼女たちが語るこれらのジェンダーステレオタイプは彼女たちが実際にこの番組内で戦ってきたものである。彼女たちは今まで女性アイドルに求められてきた「女性らしさ」に通ずるものに対して番組を通して打破し、彼女たちの個性を思う存分視聴者に提示してきた。メディアコンテンツ内であえて女性が誰かに強制されたジェンダー

---

<sup>27</sup> Youth With You, 2020, 「YouthWithYou 青春有你 2 × 时尚芭莎 全新时尚大片 NewRules 正式上线 YouthWithYou x BAZAAR Fashion album NewRules」 ([https://youtu.be/\\_0tuQUaxLDQ](https://youtu.be/_0tuQUaxLDQ)) 2020.12.6 閲覧. 英字字幕を参照し、和訳は筆者による。

ステレオタイプを反発することは、ともすればその反発に対する再批判を招く恐れがある。しかし番組の中で訓練生たちはジェンダースtereotypeに対して抵抗し、視聴者たちにこれでもかと「自分らしさ」を提示したことで、彼女たちが提示する主語が girls で語られる女性性の要求に対するアンサーを視聴者側が無抵抗で受け入れざるをえない状況が既に整えられていたといえる。

この章では『青春有你 2』を通して提示された新しい女性アイドル像の獲得とジェンダースtereotypeの再生産との関連性について考察を行ってきたがここで日本の女性アイドルである和田彩花の発言を取り上げたい。

例えば、社会に出てからは「女らしさ」の枠組みのなかで、自分の価値が決められていくことに心地悪さを感じさせた。「女らしさ」の規範は「アイドルらしさ」にも共通する点があるので、私の場合は職業を通して「女」の規範に気づくことになった。主に CD のジャケット写真や、MV などのイメージが作り出されるとき（表象）は、男性中心的な視線が用いられる。メイクは「ナチュラル」であることが長らく前提であったし、それはまるで清楚で、純粋性を保持した私が価値あるものとされているようでもあった。そういった価値観を直接向けられたときも、自分でそれを感じとったときも、「みんなのための私」でいてほしいという周囲の思いはひしひしと伝わった。私は呑気なのか、真面目なのか、対話が根本的な解決を促すと信じていたので、反抗という手段は使う気がなかった。だからか、余計に他者から向けられる規範がいつまでも私にまとわりついた。<sup>28</sup>

実際に元アンジュルムのメンバーで、初代リーダーを務めた和田彩花が話すこの内容からは、彼女はグループ所属時に抵抗せずにそのまま提示された「女」という像を受け入れ作り出された「女」を演じていたことがわかる。メイクについては「ナチュラル」でいることが要求されていたことが彼女の発言から読み取れるが、これは先述した NewRules の動画内で訓練生たちに施されたメイクは男性ウケを目指したメイクではないことが裏付けられる。そして和田が語った最後の「反抗」という言葉は『青春有你 2』が番組内を通して行な

---

<sup>28</sup> りっすん, 2020, 「『枠組み』にとらわれるのをやめた: 和田彩花」 (<https://www.e-aidem.com/ch/listen/entry/2020/11/25/103000>) 2020.11.28 閲覧.

ってきたことであり、反抗しないことで女性がそのジェンダーステレオタイプ像を受け入れているという免罪符になってしまっているということがわかる。この事実は女性自身がジェンダーステレオタイプの再生産の加担要因であると考えられる。視聴者という立場であり、それと同時に声援を送るだけの存在であるコンテンツ外の私たちは現実の世界においてメディアコンテンツで賛美される女性性を求められ辟易としている。しかしメディアコンテンツに映し出される人々は輝かしい生活を想像させ、視聴者の羨望の対象にもなる。友人でも知り合いでもない人物に親近感や崇高さを感じ、気がつけば私たちが受け取ったイメージを無意識のうちに画面越しの人物に対して押し付けてしまっている。

しかし以上のことを踏まえた上で改めて『BAZAAR』とのコラボレーション動画で表現されたものを見てみると、周囲が求める「らしさ」に対抗するための訴えかけとして映し出された彼女たちの姿は和田彩花がグループに所属していた際に行なわなかった「反抗」であるが、「反抗」するためには一目で「強い女」と見て取れるような姿でないといけなかったということである。ある意味この彼女たちがしている姿は男性にはウケず、女性から見てカッコいいと思わせる姿なのである。この事実から「女性らしさ」を否定した上で「自分らしさ」という答えが1つではないものを「カッコいい女性」が示さなければ肯定されないということであるといえる。

#### 4-6 『青春有你 2』が示した「新たな女性アイドル像」

これまで『青春有你 2』で映し出されてきたものをベースに分析を行ってきた。同番組はコンセプトテーマを「X」と定義づけ、それを「無限の可能性」とした。今までの女性アイドル像に囚われない多様性を根差した新たな女性アイドルグループの誕生を目指して番組は進められ、そこで映し出されたのは女性性を要求される女性アイドルにそれでも自分になりたいと切望し、限られたデビューへの椅子を目指して努力する姿であった。そして互いが互いの足りない部分を補い、教え合う姿や自分自身の中にあるジェンダーステレオタイプに抗おうとし、実際に抵抗をする姿はどれも視聴者にとっては真新しく、今までのサバイバルオーディションとは違った様子で盛り上がったのである。

しかし視聴者は番組のテーマの定義づけとは裏腹に、訓練生たちに旧来の女性アイドル像を押し付け悩ませた視聴者(ファン)たちの存在も明らかにされた。インターネット上で行

なわれる番組に出演する訓練生たちへの称賛の声や批判の声は匿名性を持ち、男女を区別することは出来ない。しかし番組が映し出した彼女たちを応援する視聴者(ファン)は彼女たちと同性の女性たちであったのである。実際に番組放送途中に新型コロナウイルスが流行したことで無観客のライブパフォーマンスに課題曲をリモートで評価する形に変更されたが、そこで映し出された視聴者は多くが女性であり、そして観客を入れてライブを行っていたときも客席を占めていたのは女性ファンたちであった。訓練生たちのファンだけではなく 1st シーズンの『Idol Producer』で絶大な人気を誇り NINE PERCENT でデビューした蔡徐坤(KUN)が代表メンターとして参加していたことで彼のファンである女性も多く見られたが、応援する訓練生の名前が入った電光掲示板を掲げ、応援する女性たちの姿を番組は多く映し出したのである。また女性ファンたちが刘雨昕(XIN Liu)などのボーイッシュとされるメンバーに対して黄色い歓声を上げる姿も同時に映し出され、彼女たちを応援し投票権を握っている存在として映し出された多くは同性の女性たちであったのだ。

番組内で随所に映し出された「自分らしさ」の追求とその姿の中には「ガールズグループに相応しくない」と視聴者(ファン)に評価される訓練生たちが存在していた。そのため自身の容姿について「自分らしさ」を貫き、周りの意見を跳ね除ける訓練生の発言も番組内では放送された。しかし体型については直接的な言及がなされたのである。EP9 では七穂が食事制限のためサラダを泣きながら食べるシーンも映し出され<sup>29</sup>、EP15 では自分のボディーマネジメントがしっかり出来ているかどうかを見るために番組側が訓練生たちに体重計を渡して、体重を計るシーンが放送された。そこでは訓練生たちは悲鳴を上げながらも出来る限り身につけているものを外して恐る恐る体重計に乗る姿が映し出され、公開された体重は 50kg をほとんどの訓練生たちが下回る数値であったのである。彼女たちは決して小柄というわけではなく 170cm 近い身長 of 訓練生が多くいる中で、彼女たちが語ったことは次までに痩せますというものであり、現在の体重よりも痩せようとしていたのである。それとは反対にもっと体重を増やしたいと語る訓練生もいたが、その発言に対して食べても太らないなんて羨ましいといった意味合いで他の訓練生たちが述べるシーンも映し出された<sup>30</sup>。こ

---

<sup>29</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep9 Part1 KUN Announces First Round Rankings」 (<https://www.iq.com/play/19rwrw9c9c>) 2020.12.29 閲覧.

<sup>30</sup> iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep15 Part2 KUN tempted to perform one of the new songs」 (<https://www.iq.com/play/19ry7v95wo>) 2020.12.29 閲覧.

のことから読み取ることが可能なのは痩せていることが美しいという基準が訓練生たちの中に存在しているということである。周りの評価を一蹴し「自分らしさ」を追及する姿はジェンダーステレオタイプから逃れようとする抵抗であり、番組内では実際にその抵抗が映し出されてきた。しかし痩せていることが良いとされる概念はそのまま映し出され、それを自分たちが目指している体重と共に提示したのである。このことは「女性らしさ」に含まれる容姿の部分に関与しており、「女性らしさ」を「自分らしさ」と同等に捉えられているとみることができる。

その事実を踏まえながら番組自体の構成をここで一度振り返ると、この番組はサバイバルオーディションであり参加する訓練生たちを争わせる土台の上で進められている。日本ではこの方式と似ているのはAKBグループが行なっている総選挙に代表されるファンを巻き込んだ視聴者参加型サバイバルである。菊池夏野はAKBグループが男性の人気を得る競争で頑張る少女の世界をそのまま視聴者に差し出す、最大級のエンタテインメントであるとし、この世界は伝統的なジェンダー秩序を「少女の主体的参加」という免罪符によって社会に新たに浸透させる意味を持っているとしている(菊池 2019: 179-180)。男性に強制された形ではなく自ら進んで女性アイドルを目指し、デビューに向けて努力する。そういった「少女の主体的参加」が結果として『青春有你2』が覆そうとした旧来の女性アイドル像を破壊できたかといえそうはいえず、むしろ彼女たちが打ち破ろうと努力する姿ですら商業的意味が込められ、その眼差しの多くは彼女たちと同性の女性ファンに対して向けられたものであり、この事実はジェンダー秩序を再定義し、広めているとも捉えることができるのだ。江原由美子は女性の言葉を湾曲し、その効果を消去させてしまう言説装置の存在を問題視し、「いくら女性が認識を獲得し、また表現したとしても、その言葉の継承を不可能にさせてしまうような装置が存在しているということにある。その装置こそ、女性の言葉を『社会的に共有された女性のイメージ』によって変形してしまい、その効果を殺ぎ、社会的に抹消してしまう言説体系である。別の言葉を使って言えば、社会的に共有された正当性の体系である」(江原 1988: 84) と述べている。彼女たちが番組内で示し、語った言葉が番組内で完結し、番組外でどのくらいの人々に正しく伝わっているのか。女性性を代表する女性アイドルに自ら飛び込んでいく彼女たちが発する言葉を視聴者側(受け手側)の思考をアップデートしなければ、彼女たちの我々への訴えは番組を終了することで止まってしまうことになる。そして彼女たちが示した「女性らしさ」を含む「自分らしさ」は「正しい女性像」の提示として社会的に共有されていくのである。

『青春有你 2』で提示された「新たな女性アイドル像」はファン側のジェンダーステレオタイプの女性アイドル像を揺さぶり、彼女たち自身を取り巻く「女性アイドルらしさ」の破壊に一役買っていたといえる。そしてコンセプトテーマを含む番組側が映し出した彼女たちの姿は今までのサバイバルオーディションとは異なっていたともいえる。しかし同時にそこには「女性らしさ」と「自分らしさ」が同義として解釈されてしまっていることや、「自分らしさ」として本人が捉えているもの他者が否定する構図が映し出された。また同性である女性ファンたちの存在によって男性を関与させない形で「自分らしさ」を追及していつている事実も同時に映し出され、以上の事実がジェンダーステレオタイプの再生産に女性自身が加担し、そして「正しい女性像」は他者からの判断によって構築されていると読み解くことができるといえる。

## 第 5 章 『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』の女性表象と男性消費

第 4 章では実際に行なわれたサバイバルオーディション番組『青春有你 2』を分析対象として取り上げ、女性自身の中に存在するジェンダーステレオタイプ、並びにその再生産に加担している現状について様々なエピソードを用いて分析を行なった。そしてこの第 5 章では 3 次元コンテンツである『青春有你 2』と対になるものとして 2 次元コンテンツである音楽原作キャラクターラッププロジェクト『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』を取り上げ、『青春有你 2』と同様にジェンダーに関連するテーマが読み取れるメディアコンテンツの 1 つとして分析を行なう。

『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』のストーリーとしては次の通りである。

西暦××××年。第三次世界大戦により世界は人口の 3 分の 1 を失った。人類滅亡を危惧した権力者たちは武力ではなくディベートによる戦争回避を目指した。——しかし愚かな男たちは武器による争いを止めることはなかった。そして西暦最後の年——……。既存の世界は女性の手により終わりを迎える。H 歴。武力による戦争は根絶された。争いは武力ではなく人の精神に干渉する特殊なマイクによって代わった。その名も「ヒプノシスマイク」。このマイクを通したリリックは人



の交感神経、副交感神経等に作用し、様々な状態にすることが可能になる。H 歴 3 年。人々はラップを使い優劣を決する。男性は中王区以外のイケブクロ・ディビジョン、ヨコハマ・ディビジョン、シブヤ・ディビジョン、シンジユク・ディビジョン、オオサカ・ディビジョン、ナゴヤ・ディビジョン等の区画で生活することになる。各ディビジョン代表の MC グループがバトルをし、勝った地区は決められた分の他の領土を獲得することができる。兵器ではなく言葉が力を持つことになった世界で今、男たちの威信をかけたディビジョンバトルが始まる。<sup>31</sup>

以上のように作品の世界観設定がなされ、この世界では男性が女性によって支配される側になった世界であると同時に政府にクーデターを起こし、既存の世界を終わらせた存在である言の葉党の党首はもちろん女性のため、H 歴の内閣総理大臣は女性である。しかし物語のあらすじの最後の部分には「男たちの威信をかけ」という一文があり、覇権的男性性が感じ取れる言葉が提示されている。この第 5 章では『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』という作品において女性が男性を支配している世界観設定がこの現代日本で誕生したこと、そしてこのコンテンツから影響を受ける我々現実世界の人々を軸に女性が男性を消費している構図がむしろ女性像のステレオタイプ化を助長し、女性自身がその再生産に加担してしまっている事実を紐解いていく。

#### 5-1 中王区の登場と現実の私たちとの二重構造

『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』にはカタカナ表記のシブヤ、シンジユク、ヨコハマ、オオサカ、ナゴヤの 5 つのディビジョンが現在登場しており(舞台版除く)、そのディビジョンに各 3 名ずつ男性キャラクターが所属している。女性が男性を支配している世界観ではあるものの、男性キャラクターがラップを歌うということ自体の珍しさと楽曲の良さから人気に火がついていった。あくまでも音楽原作と制作側は述べており、世界観の設定自体はあるものの音楽が先行している。そこで男性キャラクターよりも後からキャラクターデザインが発表されたのが、男性キャラクターたちを支配している側である中王区の 3 キャラクターである。

---

<sup>31</sup> 「WHAT'S HYPNOSISMIC」(<https://hypnosismic.com/about/>) 2020.12.31 閲覧。

図 29<sup>32</sup>



図 30<sup>33</sup>



図 31<sup>34</sup>



<sup>32</sup> 「東方天乙統女」 ([https://hypnosismic.com/character/others/otome\\_tohoten/](https://hypnosismic.com/character/others/otome_tohoten/)) 2021.1.7 閲覧.

<sup>33</sup> 「勘解由小路無花果」 ([https://hypnosismic.com/character/others/ichijiku\\_kadenokoji/](https://hypnosismic.com/character/others/ichijiku_kadenokoji/)) 2021.1.7 閲覧.

<sup>34</sup> 「碧棺合歓」 ([https://hypnosismic.com/character/others/nemu\\_aohitsugi/](https://hypnosismic.com/character/others/nemu_aohitsugi/)) 2021.1.7 閲覧.

言の葉党の党首であり H 歴の内閣総理大臣ある東方天乙統女(とうほうてん おとめ)はいわゆる姫カットの前髪で描かれている大和撫子的な容姿で描かれている(図②⑨)。次に言の葉党の No.2 である勘解由小路無花果(かでのこうじ いちじく)は胸を強調し描かれており、女性性を象徴するような容姿で描かれている(図③⑩)。最後に碧棺合歓(あおひつぎ ねむ)は最初の 2 人と比べ幼さが見て取れる容姿で描かれている(図③⑪)。

楽曲性の高さから認知度を増していった『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』は 2020 年 9 月に『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle- Official Guide Book』が発売されるにあたり、今まで男性キャラクターたちのみ発売されていたドラマ CD が中王区をメインストーリーとして付属し、発売した。そのドラマ CD 内のトラック『流転は篠突く雨ですら流せない』では勘解由小路無花果の過去が、『山雨来たらんと欲して風楼に満つ』では東方天乙統女の過去が初めて明かされた。『流転は篠突く雨ですら流せない』で明かされた勘解由小路無花果の過去は次の通りである。彼女は H 歴の世界になる前は女性キャスターをしており、政治家の不正汚職疑惑を自ら調査していたが、女性であることを理由に上司からは追跡を止めるように言われていた。同じ疑惑を追っていた女性ジャーナリストがいたが、その女性から疑惑に関する証拠が入った USB を渡され、彼女からこの一件から手を引くことを告げられる。家族が狙われているためと理由を話していたが、翌日その女性と家族が殺されたことが報道された。そして同日勘解由小路の妹が誘拐され、誘拐した犯人からデータを渡すよう言われ、データを渡すものの妹は既に亡くなっていた。そこで悲しみに暮れていた勘解由小路の元に同じ疑惑を追っていたという以前彼女が取材をした言の葉党党首である東方天乙統女が現れ、意味深なことを告げられるところで物語は現在に戻る<sup>35</sup>。そして次のパートである『山雨来たらんと欲して風楼に満つ』で明かされた東方天乙統女の過去は次の通りである。財閥のトップである東方天豺狼とその妻、東方天乙女子の間に生まれ、裕福な暮らしをしてきた。だが、中学生の時に男性中心の社会に違和感を覚える。その後、父の紹介で飛鳥帝という政治家と出会い、結婚。帝と乙統女の間にも生まれたのが帝統(シブヤ・ディビジョン)である。夫である帝は乙統女にとっても理解があり、言の葉党の立党に協力してくれた。しかし父の不正に関与させられていた帝は次第に乙統女の行動に否定的になっていく。最終的にヒプノシスマイクの開発に関与することになる現オオサカ・ディビジョンの天谷奴零(あまやど れい)から不正汚職疑惑に関する証拠を渡され、この証拠があれば止め

---

<sup>35</sup> EVIL LINE RECORDS, 2020, 「ヒプノシスマイク-Division Rap Battle- Official Guide Book 初回限定版付属 CD」『流転は篠突く雨ですら流せない』講談社, Track3.

られると諭される。そして警察に彼女は帝に自首するよう説得し、帝は自首することになる  
ところで物語が現在に戻る<sup>36</sup>。このように言の葉党の中核 2 人は H 歴以前の男性が優位で  
あった世界で虐げられる女性であった。男性が女性を対等に扱わず、力で言葉すらねじ伏せ  
てしまう。このような現状を変えるためにヒプノシスマイクを利用することを東方天乙統  
女は考え、政府に対してクーデターを起こすことになる。碧棺合歓に関しては「真正ヒプノ  
シスマイク」と呼ばれる、より強力な精神干渉が可能なマイクによって洗脳され、中王区の  
党员として活動している。そのためヨコハマ・ディビジョンを代表する MC グループ MAD  
TRIGGER CREW のリーダーである碧棺左馬刻は妹を奪い返したいと思っているが、彼女  
自身は言の葉党の掲げる理想に共感し、活動を行なう存在として描かれている。

このドラマパートと共に中王区の楽曲『Femme Fatale』<sup>37</sup>が発表された。このタイトルに  
もなっている Femme Fatale はデジタル大辞泉によれば「男性の運命を変える女性」という  
意味と同時に「男性を破滅させる女性」という意味を持つ言葉である<sup>38</sup>。中王区の主要 3 名  
は作品内で女性たちの圧倒的支持を集めながら国を統治し、そして男性たちを支配する側  
に回っている。そうした彼女たちのキャラクター性を表したタイトルがつけられたといえ  
る。この楽曲が発表されてからすぐにインターネット上では「中王区の女」という言葉がト  
レンドに上がる事態になった。今まで各ディビジョンの男性キャラクターたち中王区、言の  
葉党の女性キャラクターの存在は憎むべきものであり悪役として表現され、男性キャラ  
クターたちのファンも同じように捉えられていたのが楽曲で提示された中王区のメッセー  
ジの強さによって数多くの共感と呼んだのである。冒頭先述したように音楽原作と制作側  
は謳っているため、楽曲の歌詞から考察がどんどん広がっていき、作品と現実世界がリンク  
する状態になった。そして現実(インターネット上)で女性同士や男性の意見など様々な考察  
が行なわれ、争い状態にもなったのである。

そこで注目したいのはその楽曲が発表された YouTube のコメント欄である。フェミニズ  
ムを感じ取れる発言などを公に発表することは世間からバッシングを受けやすいという点  
は否定できない。しかし中王区の楽曲が発表されたときのインターネット上の賑わいはす

---

<sup>36</sup> EVIL LINE RECORDS, 2020, 「ヒプノシスマイク-Division Rap Battle- Official Guide Book 初回限定版付属 CD」『山雨来たらんと欲して風楼に満つ』講談社, Track4.

<sup>37</sup> 「中王区 言の葉党『Femme Fatale』Trailer」

(<https://www.youtube.com/watch?v=FcoQUKe9Q90>) 2020.12.24 閲覧.

<sup>38</sup> デジタル大辞泉, 「ファム-ファタル」

(<https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001015862600>) 2021.1.8 閲覧.

ごく、勇気づけられたという女性の声でコメント欄が溢れたのである。作中では女性が権力構造のトップになることで、男性によって女性性を強要される世界ではなく自分の生きたいように生きられる世界を提示しているとして捉えられたのである。東方天乙統女が背後に抱えるマイクの多さから男性キャラクターと一線を画す彼女自身の強さが表現されている。そして勘解由小路無花果は身長が 173cm ある上で高いヒールを履き、赤リップに胸が露出した格好をしている。現実世界でそうした格好をすると女性は「女性らしさ」が強調しているとされ、男性からの視線を集めるため隠すように言われる。しかしこの H 歴の世界ではそれを咎められないがゆえにそうした格好をすることが出来ている。これは中王区の区画には女性のみが生活することから男性の視線を気にせずにごろごろすることが出来る女性像を表しているといえる。最後に碧棺合歓からは男性の暴力を嫌い、幼いながら自らの力を持って対抗していく存在として捉えられている。支配側に回っている女性キャラクターを現実の女性たちが支持する構図というのは 3 キャラクターそれぞれが提示した女性の強さや男性の視線を気にせず自分らしく生きていいと読み取れるキャラクター設定が、今まで先に発売されていたドラマ CD 内で男性キャラクターたちによって言われていた悪者としての中王区とその批判のセリフをかき消し、忘れ去らせるほど強いメッセージ性であったのである。

ここで改めて述べておきたいのは作品の制作側が音楽原作とだけ謳っているおり、ジェンダー表現などについて一切の情報を語っていないということである。音楽がベースに存在し、それによってキャラクターが存在しているという位置づけになっている。そのため制作側が提示するものを受け手側である消費者(ファン)が各々に解釈を行い、ラップの歌詞やドラマパートで描かれている、散りばめられている伏線といえるものを考察し、それがファン同士の中で拡散されていく。『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』は女性向けコンテンツを制作しているオトメイトとキングレコードがタッグを組み制作されており、脚本は百瀬祐一郎が担当している。2017 年に男性キャラクター全員(当時はオオサカ・ナゴヤは未登場)で歌っている動画が発表されたのち、作品の世界観設定を補うドラマパートも公開された。その後音声のみで繰り広げられるドラマ CD で描かれているものを絵として補完することが出来るコミカライズも発売された。ここで問題が発生したのである。原作の百瀬祐一郎が脚本を手掛けたコミカライズがファンの間で論争になったのである。その理由としては、ファンが思い描いていた作品の設定とかけ離れた内容であったためである。コミカライズよりも先に発売されていたドラマ CD 内においても男性キャラクターによる差別的な

発言がセリフとして登場していたが、コミカライズ内においても女性差別とともとれる主要キャラクターによるセリフやホモフォビア的セリフなどが散りばめられており、女尊男卑な世界観設定でありながら、むしろマイノリティ差別的描写がなされていたのである。

ここでセリフだけではなく男性キャラクターの描かれ方を見てみるとこの作品は音楽を原作とし、女性が男性を支配する世界でありながら男性キャラクターと共に描写される中王区の 3 名以外の女性たちは現実の私たちと同じ様子で過ごしており、補佐的役割が女性として描かれるなど性別役割分業である部分が描写されている。そして男性キャラクターたちはそれぞれ職種が設定されており、キャラクター設定上関係してくることになっている。言の葉党が支配する H 歴の世界において男性は女性のみで構成された言の葉党によって支配され、女性の 10 倍の納税が課せられているなどが下位な存在であることを描写しつつも、彼らは主要な要職に就いているのである。圧倒的に男性が多い職種などが未だに存在し、ニュースなどで女性初の〇〇などの肩書がついてしまうような現状が残されている現実の私たちの世界とは異なり、主要男性キャラクターたちは職業によって差別されている描写もない。むしろ要職についていること、シンジック・ディビジョンを代表する MC グループ麻天狼のリーダー神宮寺寂雷は医者であり彼が務める病院の看護師は女性であるなど現実の私たちとあまり変わらない世界が描かれているのである。

それらを踏まえて多くのファンから指摘されているのが脚本家のジェンダー観が反映され、それによって世界観設定の甘さが発生してしまっているということである。作品の中で掲げられている女尊男卑的テーマ設定は現実の社会を生きる女性たちを揺さぶるものである。男性が脚本を手掛けていることで誤った女性像が提示されているということが中王区の登場によって表されているのではなく、表面上は女尊男卑的テーマを掲げながら蓋を開けてみると男尊女卑的表現がなされているという点に問題がある。これは女性が公に声を上げることが出来るようになったことを利用した、男尊女卑の再生産に他ならないといえる。フェミニズム運動の記憶の中にあるように女性が男性に対して歯向かうことは構図として皆どこかに持っている共通認識として存在している。男性が女性に対して差別的行動をすることも、その言動に対して女性が男性を批判する構図の方が被差別側からの反発として見慣れているのである。そのため第 1 章で触れたメディアコンテンツの制作側の男女比率を踏まえると、女性自身が女性に対して訴えかける際、その訴えかける側の女性が発言するスクリプトの内容についてはそれを発言させた男性が必然的に存在しており、そこにはその男性のジェンダー観が自然と反映されるのである。それらを踏まえると『ヒプノシス

マイク-Division Rap Battle-』は根底にミソジニー的思想がある上にミサンドリー的な作品設定がなされているのである。そのため作品としては女性向けとされ女性ファンが多い中で、支配している側である中王区は各ディビジョンの男性キャラクターたちにとっては倒すべき敵であり、彼らを中王区に対して歯向かっていく存在として描くことで、敵に立ち向かっていくヒーローとして描かれてしまっているのである。

2017年に作品が登場し、男性キャラクターたちがラップバトルをするという作品設定は物珍しく、それと共に楽曲性も高いことでより話題になった。作品テーマとして女性が男性を支配している構図にはなっているものの、男性キャラクターたちが目に見えて差別を受けている女性差別と比べるとあまりにも描写がない。それも男性キャラクターによるマイノリティを差別するようなセリフまで登場し、脚本家が批判される事態になっても楽曲先行である作品自体の人気の高まっていくことでそのグレーな部分が曖昧になり、作品のベースに潜むミソジニー部分を認識している人々がほとんどいない状態になっている。そのため中王区は男性キャラクターたちよりもキャラクターデザインの発表も楽曲発表も後であったが、印象的な登場の仕方により作品の根底に潜む男尊女卑的な部分が覆い隠され、フェミニズム的部分が大々的に打ち出されているのである。2018年に出されたインタビュー記事『『フリースタイルダンジョン』でシーンのミソジニーを喝破したラッパー・椿の“人生を使ったカウンター”』<sup>39</sup>ではラッパーの椿がテレビ朝日系のMCバトル番組『フリースタイルダンジョン』でモンスター・呂布カルマと対戦し、HIPHOPシーンのミソジニーを糾弾したことに触れ、そこから彼女自身の経験が綴られている。ラップは男性のものであるという認識の強さから、ミソジニーだけではなくホモフォビアな面も併せ持っている。HIPHOPにおけるラッパーのベースにあるミソジニーやホモフォビアを踏まえると、『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』という作品は女性が男性を支配する物語であり、HIPHOPの歴史を覆している。しかし男性キャラクターたちが中王区に向ける言葉や感情は女性を敵視するものであり、ミソジニー的なものである。この作品が中王区を介し、放っているメッセージは女性を味方につけながら実はミソジニー的構図に取り込まれ、それを再生産してしまっているのである。

---

<sup>39</sup> Wezzy, 2018, 「『フリースタイルダンジョン』でシーンのミソジニーを喝破したラッパー・椿の“人生を使ったカウンター”」 (<https://wezz-y.com/archives/53053>) 2020.12.24 閲覧。



## 5-2 男性を消費する女性たちの考察

5-1 では中王区という女尊男卑的テーマの登場とその根底に潜む男尊女卑から現実女性たちの受け止め方について考察を行ってきた。この 5-2 では制作側に見えてくる男尊女卑的ベースの上に立っている『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』に登場する男性キャラクターを女性ファンが消費する構図から女性がジェンダーステレオタイプの再生産に加担していることについて考察を行っていく。

メディアコンテンツ内で描かれる女性は性的客体として消費されてきた背景が存在している。性的な表現がそもそもなされていなかった時代と比較し、女性が解放的な存在として水着などのグラビアが広告として起用されるようになったとも考えられるが、広告などの表現で露出する必要がないのに大幅に肌を露出するような服を着て映し出すなど男性では取られない表現がなされてきた。しかし同時に女性が男性を消費する構図も現代では存在している。それは男性アイドルの誕生により女性が男性を性的客体として消費できる手段を取ることが出来るようになったからである。この事実を踏まえるとこれまで男性のみがいた性的消費を行なう側に女性も立つことができたかのように見える。

だが果たしてそう言えるだろうか。男性が女性に対して行なってきた「性的消費」を女性が男性に対して行なう時、そこには同じよう違うジェンダーステレオタイプの再生産が行なわれている。田中東子は男を消費する女の問題についてジャニーズなどのオタクである女性たちから相談を受けるということに触れつつ、女をまなざし、消費できるという男だけが独占してきたポジションに、女性たちもようやくたどり着くことができたのだと、そのようにただ単純に肯定してしまえばいいのだろうかとか疑問を投げかけている。そして田中はその肯定は、男も女も互いに消費しあっているのだからと、男女間の未だ非対等で不平等な関係性を追認することにつながりはしないのかと、そのことに悩みながらオタクの沼に浸っている女性たちは、案外多く存在しているはずだと指摘する(田中 2020:200-201)。女性は性的搾取をされてきた側に立ち続けてきたことで自分がその立場を手に入れたときに、自分自身がいた場所を思い出し、一度立ち止まる。今自分が行なっていることは自分を応援している人をただ消費してしまっているだけではないのかと感じるのである。

男性アイドルの代表ともいえるジャニーズタレントを女性ファンが応援する行為に代表されるような消費行為は男性が女性に対して行なってきた消費と異なるように見えるこの違和感は何なのだろうか。『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』は作品設定としては女



性が国のトップであり、殺傷能力のある武器が禁止され言葉で戦うことを義務付けられているが、その作品そのものを現実の私たちが消費し、男性キャラクター並びに演じている男性声優を消費しているという二重構造になってしまっている。現在ではガイドルールが存在しているがヒプノシスマイクの公式は本来グレーな扱いである二次創作を公式自ら Twitter のモーメントにまとめる(通称「ヒプマイ事変」)など、その行為自体を肯定してきたことで知られている。実際に行なわれていた二次創作内でのジャンルを見てみると BL(ボーイズラブ)の作品が多く、自らキャラクターを消費する作品を生み出すことが行なわれてきた。「中王区」の登場により、女性ファンたちは皆勇気づけられた反面、その作品に登場する男性キャラクターたちを消費しているという紛れもない事実が同時に存在しているのである。

しかしその消費行動に対して別の視点から見てみたい。名藤多香子は BL 作品を好み腐女子と括られる女性たちがおおっぴらに語れず、女性自身もそう感じてきた理由について、セクシュアルな主題を扱っている作品の多さが、女性たちにこのテーマについて語ることを抑圧させている理由である(日本社会においては、公共空間で女性が性的な話をする事への社会的圧力が未だに大きい)と指摘している(名藤 2007: 68-69)。名藤が指摘するこの点に、違和感の差異を見出すことが出来るのではないだろうか。セクシュアルな話題について男性が話すことと女性が話すことを同じように肯定的に捉えられるか否定的に見られるかの差が存在している。男性は女性を性的客体として消費する発言は容認されてきたが、女性が男性を性的客体として消費する発言は「淫乱」扱いを受け、隠さざるを得ない状況におかれてきたのである。AKB48 の柏木由紀は自身の YouTube チャンネルでグラビア撮影の動画に対して性的なコメントが書き込まれているとして、そのコメントに対して言及を行なう動画をアップロードした<sup>40</sup>。この事例を踏まえて考えてみると、今では男性アイドルに代表されるジャニーズ事務所も公式の YouTube チャンネルを持ち、所属タレントが企画動画をアップロードしている。その彼らのアップロードした動画のコメント欄に同様のコメントが書き込まれているかといえばそうではない。女性アイドルと男性アイドルという両者ともファンに消費される側に立つ存在であるが、性的な発言を向けられるなどの性的消費に差が存在し、それは直接的消費と二次創作などの間接的消費といえる差である。

そして性的消費以外にもう一つ考えられる消費の形が存在する。それは性的消費と同時

---

<sup>40</sup> ゆきりんワールド, 2020, 「コメントにいいね押すつもりが変なコメント多すぎて柏木由紀怒ってます」 ([https://youtu.be/m3v\\_7RXFSyk](https://youtu.be/m3v_7RXFSyk)) 2020.12.22 閲覧.

に発生する金銭的消費についてである。アイドルなどを応援するときには必然と資金がいる。『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』の作品中の一般市民女性たちを見てみると、男性より優位な立場にあることで、各ディビジョンのバトルを見世物的に楽しみ男性キャラクターたちを消費する側として描かれているが、現実世界のファンも同じ様相である。1st Battle CD を発売した際に各ディビジョン同士でバトルを行い、1 位を獲得したディビジョンは新曲を発売することができるという企画を行なった際に、ファンである多く女性たちが大金を積み、自分の好きなディビジョンの CD を何枚も購入し投票するということが起きた。このように『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』の世界は現実世界の我々を取り込みながら、女性が男性を消費する側に回っている世界も同時に映し出している。

AKB48 グループにおける総選挙にも代表されるような投票権を購入できる仕組みは多くが男性ファンである AKB48 グループと同じ構成であるが、ここにも差が存在しているといえる。性的な発言も含め金銭的なこと全般を女性が見せびらかすようなことが暗黙の了解的にタブー視されている様子がある。女性は男性を立てるものであり、メンツをつぶさないようにする。酒井順子は『男尊女子』(2020)の中で九州における男尊女卑的暗黙の決まりについて触れ、男性がまだ若く貧乏な時、自分より稼ぎのある女性と付き合っていたがその女性はデートの日には必ず何枚かの 1 万円札が入った自分のお財布を男性にそっと渡し、そこから男性が全ての会計を支払うようにしてくれた女性の態度に男性はグツときてめでたく 2 人は結婚したというエピソードを挙げている(酒井 2020: 49)。この事例を踏まえて考えてみると、女性の方がお金を持っているからといって男性とデートをする際に女性の財布から全ての場所でお金を支払っていたら男性はメンツを潰されたことになり、グツときていないのである。女性が異性に対して関係してくるお金というアイテムにも男女で差が存在している。

そしてその金銭的消費の中には女性に求められてきたケア的役割が関係しているといえる。旧態依然の家庭であれば夫が稼いだお金を軸に妻がやりくりをするといった構図のため、妻が夫並みにお金を稼ぐことも働きに出ることもよく思われていなかった時代があるわけであるが、日本の映像作品などでよく見られる夫の貧しい稼ぎをなんとか妻がやりくりし必死に生活をしていることが美談として表現される。お金があるなしに関わらず、男性を支える女性という構図が未だ残されているわけであり、男性の「推し」に対して女性が間接的でもお金を投資するということは相反するようになって、男性が女性の「推し」に投資するときとは違った意味合いを持つことになる。「推し」を応援する行為そのものはさ

して変わりはないが、「支える」という意味合いに差が出てくる。今の日本社会においては依然男女の賃金格差は残ったままであり、割合として男性の方が資金を持っていることになる。養ってやっている感覚となけなしのお金を使うこと自体に「推し」に対する投資側の感覚は異なってくるのである。

この性的消費と金銭的消費を含む消費行為がどのような形で女性自身がジェンダーステレオタイプの再生産加担に繋がっているのだろうか。辻泉はジャニーズアイドルのファンが他のファンを批判する怪文書（SNS が登場するよりも前のもの）を分析し、次のように考察を提示している。外見的な要素に関する自己評価が低い（=自信がない）がゆえに、着飾るようなファッションや異性へのアピールといった「女性らしさ」からは距離をとろうとしている。しかしその一方で、自分とアイドルとの関係の安住さを維持するために、その障害になるものを直接的に取り除くのではなく、むしろ仲間内で悪い噂（=『怪文書』）を広めることで間接的に攻撃しようとしている。このふるまいは、いわゆる「女性らしさ」とされるふるまいの中でも特にネガティブなものの一つではないだろうか（辻 2007: 279）。この指摘と併せて先述してきた女性の性的発言タブー視と金銭的消費の男女差から見ると、同じ消費行動であってもそこに内包される要素が男女で異なっていることがわかる。女性がアイコン的存在を消費するとき直接的男性とは異なり、間接的に消費している。その間接的消費が「女性らしさ」と捉えられるような行動であり、「推し」を応援するための金銭的消費ですら男性ファンと女性ファンではその見せびらかし方が異なっているのである。

## 終章

これまで様々な角度から考察を行い、第 1 章から第 5 章を通して明らかになったのは、女性はジェンダーステレオタイプの再生産に加担させられているということである。第 1 章ではメディアコンテンツ内で提示されるものに対して受け手側の解釈作業を必要とし、差別的な表現がメディアコンテンツ内でなされていたとしても、その表現を指摘した人に対しても批判が発生する構図が存在していることを明らかにした。そして未だにメディアコンテンツ内では男性が制作側の性別割合の大部分を占めており、その現状のままポリティカル・コレクトネスに配慮した表現がなされるようになった結果、「自分らしさ」を「女性

らしさ」の代替表現として提示することでジェンダー規範を再定義している現状を示した。第 2 章からは具体的な事例を挙げて分析を行なった。女性は容姿評価をされる受け身的存在であり、「自分らしさ」の追求に「女性らしさ」の解釈のすり替えが行なわれていた。第 3 章では女性自身が行なう自虐発言によってジェンダーステレオタイプが再生産される要因になってしまっているだけでなく、女性の自虐発言に対して自虐をやめよう(やめたい)という発言にも批判が集まったことを挙げた。この点は第 1 章で触れた不適切指摘に対する批判と同様の例であることがわかった。「女性らしさ」から解放され「自分らしさ」を提示することも批判の対象になってしまうということである。第 4 章ではメディアコンテンツの実例としてサバイバルオーディション番組『青春有你 2』を取り上げ、分析を行なった。女性が「自分らしさ」を求める姿をメディアコンテンツ内で映し出すことですら商業的要素が含まれており、「女性らしさ」と呼ばれるものを一部否定するのみでとどまることで「女性らしさ」と「自分らしさ」の意味合いが曖昧に、そしてその意味を組み替えられてしまっていることを示した。第 5 章では『ヒプノシスマイク-Division Rap Battle-』を取り上げ、男性脚本家によるミサンドリー的な作品設定に対し、ミソジニーが根底に潜む表象がなされる中でそれを女性ファンたちが消費している構図を取り上げた。作品で提示されているテーマに対して解釈度合いの違いからミソジニー的思想が根底にあったとしてもそれを享受し、コンテンツとしてそれを楽しみ消費することは差別的な表現を肯定することに繋がり、女性自身がジェンダーステレオタイプの再生産に加担してしまうことが明らかにされた。

以上を踏まえてわかったことは、周囲からあからさまな差別やセクシュアルハラスメントと受け取れる発言や行動については世間の反感を買うことになるため、それ自体はどんどん減ってきているが、それに対応するかのように女性は女性特有の「自分らしさ」を追及することを求められるようになったということである。ジェンダーステレオタイプとしての「女性らしさ」は一括りにできるといえるが、「自分らしさ」は人の数だけ存在している概念であるといえる。しかしメディアコンテンツの制作側を見ると男性が未だ多くの割合を占め、「自分らしさ」の追求の様は女性の解放を示す姿でありながら、それと同時にジェンダー秩序を再定義してしまっているといえる。

制作の決定権が未だ男性に握られている状態でジェンダーステレオタイプ像の流布と LGBT などの言葉だけが流行のような形で広まっていった結果、こういった内容の作品が一般消費者にウケるのかという部分に影響してくる。男女差別というものが明確に法律の

段階であった時代と比較すると現在は極めて平等であり、平等になるための教育も施されている。そのはずがどこか違和感があるのは何故なのか。それは男性が今まで行使してきた差別側のポジションを女性にも渡すことで批判を回避し、傍から見ると女性は男性に差別されておらず、平等に見えるのである。男性が女性を差別するという構図だと反感を買うのに対し、ジェンダーステレオタイプを生み出す側に女性を招き入れる映し出し方は男性にとっても女性にとっても味方として映すことが可能であり、批判的な意見をかわすことができるのである。

その現状の上でこれまでの分析を通して明らかになったのは「女性らしさ」を肯定するためには今までの「女性らしさ」と呼ばれるものを否定した上で、それを「自分らしさ」と肯定することで「女性らしさ」を獲得できるということである。その作業は男性にはないものであり、そのため女性自身がジェンダーステレオタイプの再生産に加担している構図が描かれるように見えるのである。表象としては平等に見えるが、今度は男性が考える男女平等的表現になると被差別側から差別側に回ることになるため、女性は男性と同じ立場から発言し、平等であるかのような振る舞いをする。下駄すら履かされていない女性は同性である差別側に回った女性を見て、嫌悪感を抱くのである。江原由美子は70年代リブ運動を取り巻いたマスコミの論調を踏まえ、そのときからマスコミの女性解放論に対する取り上げ方がすいぶん変化しているとしつつ、基本的には何も変わっていないと述べている(江原1988:83)。そして江原は現在もなお、女性の主張を「とるに足らないもの」と断じ、女性論を展開するものの主張をあたかも「教示的」「硬直的」「滑稽」なものに感じさせるような社会的な装置が存在しているように感じると述べた上で、女性がいかに女性であるがゆえに被っている抑圧や拘束感を述べても、それは本当の抑圧や支配の問題としてほとんど認識されず、女性たちが感じていることをそのまま受け入れるのではなく、「女性とはこうした生き物」という社会的なイメージ、すなわち男性が当然と考えている「女性像」から、その言葉や表現を判断されることで女性の言葉は、そうした「女性の社会的イメージ」から逃れられないと述べている(江原1988:84)。こう江原が『フェミニズムと権力作用』(1988)で語るのは今から約30年前の事である。女性たちの訴えに対して男性たちが求めるジェンダーステレオタイプの女性像から逃れられない現状は未だに続いている。それは女性がジェンダーステレオタイプから解放されているように見える現在において、「新たな女性像」を提示がなされることで再生産され続けてしまっている。

結果として女性自身がジェンダーステレオタイプの再生産に加担している事実は存在し

ている。しかしその裏には未だ残された男女格差が存在しており、女性は加担しているのではなく実際は加担させられているという表現が正しいといえるのである。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、3年生の時から2年間ご指導していただいた卒業論文指導教員に加藤秀一先生に心から感謝致します。またこのような未曾有の事態の中、例年と違う形でのゼミにおいて共に活発な議論を行ない、それにより多くの知識を獲得させて頂いたゼミの皆様に深く感謝申し上げます。

【参考文献】

江原由美子, 1988, 「『受け手』の解釈作業とマス・メディアの影響力」『新聞学評論』37(0), pp.51-65.

田中東子, 2012, 『メディア文化とジェンダーの社会学：第三波フェミニズムの視点から』世界思想社.

瀬地山角, 2020, 『炎上 CM でよみとくジェンダー論』光文社.

谷本奈穂, 2015, 「複雑化する美の呪縛：ある批判言説を読み解く」『関西大学総合情報学部紀要』(42), pp. 47-55.

谷本奈穂, 2017, 「美容整形というコミュニケーション：外見に関わり合う女性同士」『フォーラム現代社会学』16, pp.3-14.

上野千鶴子, 2018, 『女ざらい』朝日新聞出版.

酒井順子, 2020, 『男尊女子』集英社.

水島広子, 2014, 『女子の人間関係』サンクチュアリ出版.

菊池夏野, 2019, 『日本のポストフェミニズム：「女子力」とネオリベリズム』大月書店.

江原由美子, 1988, 『フェミニズムと権力作用』勁草書房.

田中東子, 2020, 「のがれること・つくること・つながること」『ユリイカ 9月号』52(11), pp.195-201.

名藤多香子, 2007, 「『二次創作』活動とそのネットワークについて」玉川博章・名藤多香子・小林義寛・岡井崇之・東園子・辻泉編『それぞれのファン研究』風塵社, pp.55-117.

辻泉, 2007, 「関係性の楽園／地獄：ジャニーズ系アイドルをめぐるファンたちのコミュニケーション」 玉川博章・名藤多香子・小林義寛・岡井崇之・東園子・辻泉編『それぞれのファン研究』風塵社, pp.243-289.

【参考資料】

図①～④

iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep3 Part2 Esther Yu's performance on the rating stage stunned KUN」 (<https://www.iq.com/play/19rww8131g>) 2020.12.5 閲覧.

図⑤～⑭

iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep2 Part2 The first contestant who gets an A」 (<https://www.iq.com/play/19rxs600o>) 2020.12.5 閲覧.

図⑮～⑳

iQIYI(愛奇芸), 2020, 「Youth With You Season 2 English version Ep8 Part2 LISA becomes a tough mentor」 (<https://www.iq.com/play/19rwtrp7ik>) 2020.12.5 閲覧.

図㉑

Youth With You, 2020, 「YouthWithYou 青春有你2 × 时尚芭莎 全新时尚大片 NewRules 正式上线 YouthWithYou x BAZAAR Fashion album NewRules」 ([https://youtu.be/\\_0tuQUaxLDQ](https://youtu.be/_0tuQUaxLDQ)) 2020.12.6 閲覧.

※本論文中で使用した画像は全て参照した上記動画からキャプチャーしたものである。

図㉒

「東方天乙統女」 ([https://hypnosismic.com/character/others/otome\\_tohoten/](https://hypnosismic.com/character/others/otome_tohoten/)) 2021.1.7 閲覧.



図③⑩

「勘解由小路無花果」([https://hypnosismic.com/character/others/ichijiku\\_kadenokoji/](https://hypnosismic.com/character/others/ichijiku_kadenokoji/))  
2021.1.7 閲覧.

図③⑪

「碧棺合歓」([https://hypnosismic.com/character/others/nemu\\_aohitsugi/](https://hypnosismic.com/character/others/nemu_aohitsugi/)) 2021.1.7 閲覧.

※本論文中で使用了画像は全て参照した上記公式サイトからキャプチャーしたものである。